

イサーク＝ギリエッド・ヨーラム＝ハイミー・ヴォイチェフ＝マズリク(著)

ナチス絶滅収容所の発掘調査

鬼 東 芽 依
山 本 恵 梨
伊 藤 慎 二(訳)

本稿は、ナチスのヘウムノ (Chełmno)・トレブリンカ (Treblinka)・ソビボル (Sobibór)・ベウジェツ (Bełżec) 絶滅収容所の考古学を取り上げる。特に準野外的な調査法の観点から論じる。強制収容所の考古学は、法医学考古学から、戦闘 (Combat) 考古学と産業考古学を介して、パブリック考古学と歴史考古学まで、様々な細目学問分野の対象でもある。私たちは前提として、(訳註：ユダヤ人の) 絶滅の工程は実際に過去に起こったことであり、考古学的発掘調査によって改めて証明する必要はない、一連の歴史的に立証された出来事であると考え。私たちの調査事例では、考古学は、特に収容所遺跡の平面構成や建造物と遺物の観点から、情報を補足し空白を埋める役割を担う。私たちは、1980年代中葉以降の絶滅収容所に関する研究について紹介し、収容所遺跡の破壊過程という一面に関して検討し、さらに収容所遺跡の過去と将来の計画とその内容の決定に盗掘やその他の行動が及ぼした役割を強調して説明する。これらの観点は、私たちがソビボル絶滅収容所遺跡で2007年と2008年に行った考古学的調査のいくつかの結果を基に例証されている。私たちは、たとえばガス室のような絶滅収容所遺跡における重要な遺構の正しい位置を示すことができるが、未解明の部分も残る。考古学は、絶滅収容所の空間的な配置の復元や保存のみでなく、収容所遺跡の堆積物中に埋もれた遺物を研究し解釈するうえでも不可欠であるといえる。

序 論

1941年から1944年の間に、ナチスは「ユダヤ人問題に対する最終解決」を見出そうと企て、何百万人もの人々を殺害する絶滅計画を創案した。被害者の半分以上は以下の6つの絶滅収容所で殺害された：ポーランド西部のアウシュヴィッツ＝ビルケナウ（Auschwitz-Birkenau）収容所とヘウムノ（Chełmno）収容所、およびポーランド東部のトレブリンカ（Treblinka）収容所、ソビボル（Sobibór）収容所、マイダネク（Majdanek）収容所とベウジェツ（Bełżec）収容所である。「最終解決」に関する歴史学的研究は非常に徹底的に行われなかつ継続中であるが（例：Gilbert 1986；Hilberg 1985）、絶滅収容所（extermination centres）に関する考古学的研究の範囲は非常に限られている。すべてのかつての絶滅収容所は、博物館や追悼の場を伴う遺産センター（heritage centres）へと姿を変えた。たとえば、かつてベウジェツ絶滅収容所があった場所のほぼ全域は、最近巨大なモニュメント（祈念施設）になった。したがって、このような遺跡で考古学的調査を行うのは不可能で、私たちには祈念施設と博物館が2004年に開設される前に行われた発掘調査によって得られた情報が残されているのみである。しかしながら、ヴウォダヴァ（Włodawa）の南に位置するかつてのソビボル絶滅収容所を発掘調査することはまだ可能である。

1943年後半にナチスがソビボルでの虐殺を終えて以来、収容所遺跡がある場所での建設行為は最小限にとどまっていた（線路の近くにあるかつての幼稚園中の小博物館と同様に、遺灰塚の祈念施設と近くの彫像とモニュメントは1960年代に建立された）。それゆえに、絶滅収容所であった大部分の範囲は考古学的に調査可能な潜在的余地がある。これは、2006年に本論の共著者の一人（ヨーラム＝ハイミー：Yoram Haimi）が、博士論文研究の構想の中で、ソビボルにおける考古学的調査計画が実施できる可能性を示していたことが、理由の一つでもある。その後のソビボル発掘調査計画は、ベングリオン大学考古学部門を代表して私たちの中の二人（イサーク＝ギリエッド Issac Gilead とヨーラム＝ハイミー Yoram Haimi）およびソビボル博物館のマレク＝ベム（Marek Bem）とヴォイチェフ＝マズリク（Wojciech Mazurek）、イスラエル・ホロコースト殉教者・英雄記憶公社のヤド＝ヴァシエム（Yad Vashem＝ホロコースト祈念館）によって編成された。

2007年10月に、私たちはソビボル収容所遺跡の第2収容区（Camps 2）と第3収容

区 (Camps 3) の間の限られた一部範囲において最初の野外調査を実施した。2008年7月に、私たちはアメリカの調査隊と共同で、第Ⅱ収容区 (Camps II) と第Ⅲ収容区 (Camps III) の範囲で地球物理学的分析を目的とした追加野外調査に注力した。つい最近実施した考古学と地球物理学の側面の調査はまだ予備的段階のため、それらに関しては事例の紹介として簡潔にとどめたい。私たちは、ナチス絶滅収容所における考古学的調査に関連した課題と展望や調査方法の諸問題などのいくつかの側面について、より多くの紙幅を割きたい。

方法論および理論的検討

1. ナチス収容所の分類

この論文は、1942年～1943年におけるナチスの作戦中の「絶滅収容所 (extermination centres)」に関して、典型的観点から取り上げることを主題とする。ユダヤ人やその他の集団もしくは個人を抹殺するための計画的な場所であった絶滅収容所では、そのような収容所に主に列車で輸送されてきた人々が到着次第ガスで殺され、ただちに焼却され、あるいはそのまま埋められた。殺害されたユダヤ人の多くはポーランドから運ばれてきたが、東・西・南ヨーロッパなど他の地域に住んでいたユダヤ人たちもまた、絶滅収容所に運ばれ殺された。絶滅収容所は、約20名のナチス親衛隊 (SS) と、主にウクライナ人からなる多数の補充兵によって運営されていた。各収容所では、300人から600人のユダヤ人が奴隷化されていた。彼らは、(訳註：ナチスが) 没収した財産を整理してまとめる作業か、死体の焼却と埋葬に従事するか、どちらかの作業をさせられた。西ポーランドにはヘウムノ (Chełmno) 絶滅収容所、東ポーランドにはトレブリンカ (Treblinka) 絶滅収容所・ソビボル (Sobibór) 絶滅収容所・ベウジェツ (Bełżec) 絶滅収容所という四つの絶滅収容所が存在した (図1)。ヒルバーク (Hilberg 1985 : 863-894頁) はヨーロッパにおけるユダヤ人の虐殺が、上記の四か所に西ポーランドのクラコフ (Krakow) に近いアウシュヴィッツ＝ビルケナウ (Auschwitz-Birkenau) 収容所と東ポーランドのルブリン (Lublin) のマイダネク (Majdanek) 収容所を加えた六つの「絶滅収容所 (killing centres)」で行われたという、異なった類型を提示する。後者の二つは他の絶滅収容所とは明白に違っており、前者の収容所より数倍も規模が大きい。ユダヤ人たちはそこでも同様にガス (チクロン B : Zyklon

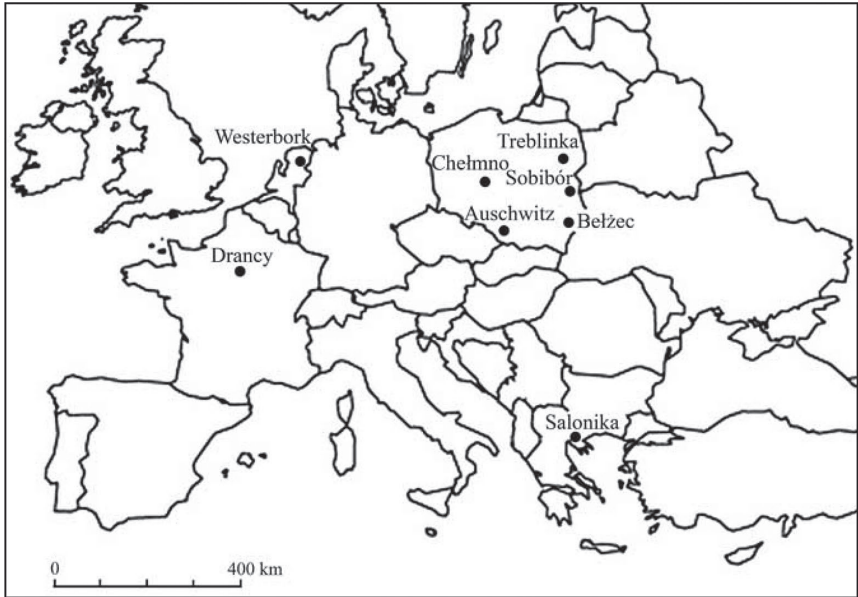


図1 ポーランドのナチス絶滅・強制収容所と収容所移送用の中継地の位置

B)によって殺害されたが、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所とマイダネク収容所のほとんどの空間は、ユダヤ人が多くを占める数十万もの人々が強制労働のための人員として収容された強制収容所として使われた (Hilberg 1985: 917-936頁)。

平面配置・建造物・遺跡形成過程に関する考古学的観点に基づく、四つの絶滅収容所はアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所・マイダネク収容所とは明らかに異なるカテゴリーを形成している。後者はもともと強制収容所として建設されたもので、ユダヤ人の虐殺が行われる以前・行われている最中・行われた以後にも、強制労働の場として使用されていた。それらの収容所はソ連赤軍が到達するまで使われていたので、建造物／収容舎は今日もなお現存している (図2)。絶滅収容所もまた、その特有の機能と歴史において、考古学的にはっきりと区別できる。それらは、主にポーランドにおけるユダヤ人の絶滅を目的にして設立され、1943年の後半に使命を終えた後、絶滅工程の隠蔽を試みるナチス親衛隊によって破壊された (収容舎は解体され、ガス室は爆破によって抹消され、そして跡地は植林された)。このように、考古学的観点か



図2 マイダネク（Majdanek）収容所：全景

ら、収容所は四つの「絶滅収容所」と二つの「強制・絶滅収容所」という二種類のカテゴリーにまとめられる。

2. 歴史学・考古学および細目学問分野的識別の観点

ナチス絶滅収容所の考古学は、考古学のいくつかの細目学問分野における研究課題となりうる。これらの収容所遺跡それぞれにおける埋められたあるいは焼却された数十万もの遺体は、法医考古学的研究法（例：Connor 2007）や災害考古学的研究法（Gould 2007）の適用が期待される。コラ（Kola 2000）は、ベウジェツとソビボルの広大な範囲を徹底的にボーリング調査し、彼が取り出したコアサンプルは、集団埋葬地の位置と範囲を明確にするために使用された（下記参照）。コラに集団埋葬地でのボーリング調査が許可されたことは、正統派ユダヤ人にとって「とてつもない失敗」とみなされた（Weiss 2003）。現在の観点からは、ナチス絶滅収容所の集団埋葬地の発掘調査は当分期待できないであろう。（訳註：集団埋葬地の）位置と範囲に関する情報は、法医考古学の標準的方法である遠隔画像と非破壊の地球物理学的方法に

よって取得できる (Cheetham ほか 2007 : 196-206頁)。

戦闘考古学は、物質文化における戦争が反映する諸問題に関連し、それらの表現と記憶 (例 : Schofield ほか 2002, Schofield 2005) は、絶滅収容所の研究に重要な視点を加える。産業考古学の細目学問分野も注目に値し (例 : Casella and Symond 2005, Cossons 2000), 列車の降車場からガス室, そして集団埋葬地までの「コンベヤーベルト」工程 (Hilberg 1985 : 967-976頁) の状況を説明するのに適切である。歴史考古学もまた関連性があり, 考古学／歴史学と考古遺物／文書記録の対立性に特に関わる (Hall and Silliman 2006, Hicks and Beaudry 2006)。

私たちは、第二次世界大戦におけるナチスによるユダヤ人絶滅作戦は過去にあった事実だと理解している。それを裏付ける、書き留められ口述された十分な記録があり、ヒルバーグ (Hilberg 1985) が『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』と題して証明した包括的で詳細な歴史学的研究もある。アラド (Arad 1987) は、「ラインハルト作戦 (*Einsatz Reinhardt*)」絶滅収容所に関する彼の研究において、トレ布林カ絶滅収容所・ソビボル絶滅収容所・ベウジェツ絶滅収容所の絶滅工程における役割をさらに明確にした。文字記録の他にも、生還者と絶滅収容所で作業に従事し殺人に関与したナチス親衛隊員の口述記録が同じく証拠として成立している (Bezwińska and Schindler 2002, Rückerl 1977, Sereny 1983)。したがって、ユダヤ人の絶滅作戦全般、そして特にソビボル絶滅収容所とその他の収容所におけるユダヤ人の絶滅作戦は、考古学的発掘調査によって改めて証明される必要のない歴史学的に証明された事実である。考古学は、収容所遺跡の平面配置や、そこで使用された建造物・遺物の情報を補完する役割を持ち、収容所遺跡の歴史的再現に関する情報を提供する。

エヴァンス (Evans 1997) は、何が実際に起こったかを知るための歴史学者の能力を擁護する立場から、歴史修正主義者たちによるホロコーストの否定を拒絶し、「アウシュヴィッツは単なる言説ではない…ガス室も修辭の一部ではない (同書124頁)」と指摘している。モerland (Moreland 2001 : 114頁) は、彼の著書である『考古学と文字記録』でこの記述を引用し、歴史考古学はユダヤ人絶滅作戦の真実を確かめることができ、「…歴史修正主義者たちの嘘に対峙…」することができる」と指摘している。ソビボル絶滅収容所および他の絶滅収容所の敷地に熟知し、さらに、歴史修正主義者の書き物について詳しくなると、私たちは概して絶滅工程の実態、特にガス室に関する歴史考古学の役割について、より控えめな立場をとる。絶滅収容所の証拠が加

害者により抹消されたことを知っているのに、私たちはもし原位置にガス室の遺構が残っていたとしても、当然非常に悪い状態であると考えている。もしマイダネク収容所とアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所に現存するガス室が抹消されていた場合、仮に現在このような否定に最小の機会があるとしても、将来良好でない状態の遺構が検出されれば、それらが歴史修正主義者たちの嘘に対峙する真実を明示するであろう。絶滅収容所の考古学は歴史修正主義者たちの悪意を示す道具ではないし、なり得ない。私たちは記録の詳細こそが本質的に重要と考えており、(訳註：歴史修正主義者の)嘘を証明する必要を措いても、地理学の教授や考古学者もエヴァンスの例え話 (Evans 2002: 237頁) に同調して、地球は平らだと考えているような人々と議論をして時間を無駄にするべきではない。

3. 収容所遺跡の破壊過程

絶滅収容所はとて最近の考古学的遺跡であり、最初に設置されて以来、絶えず徹底的な改変が行われ続けている。それらの改変の特筆される理由としては、改築、隠蔽、盗掘、戦後の証拠収集と追悼であった。

改築：絶滅収容所の実際の建設は、1941年の後半（ハウムノ Chelmno 絶滅収容所、ベウジェツ Bełżec 絶滅収容所）および1942年3月と5月（ソビボル Sobibór 絶滅収容所とトレ布林カ Treblinka 絶滅収容所のそれぞれ）に開始された (Arad 1987: 4-6章)。その数か月後、ベウジェツ絶滅収容所では1942年6月～7月、ソビボル絶滅収容所とトレ布林カ絶滅収容所では1942年9月～10月にかけて改築工程が実施された (Arad 1987: 16章)。最もよく改変について記録されているのはそれらのガス室と集団埋葬地である。ベウジェツ絶滅収容所・ソビボル絶滅収容所・トレ布林カ絶滅収容所の三つの絶滅収容所の全てで、当初の三つのガス施設部屋を六つのガス室を備えた新しい建物に建て替えた (Hilberg 1985: 879頁も参照)。しかしながら、それらの詳細は、明らかなものばかりではない。たとえば、ベウジェツ絶滅収容所では、新しいガス室が収容所の異なる場所に移動されたことが知られている。ソビボル絶滅収容所の場合は、初期のガス室に代わって作られた新しいガス室の場所は不明である。

隠蔽：ソビボル絶滅収容所とトレ布林カ絶滅収容所へのヒムラー (Himmler) の訪問中あるいは訪問後すぐ、ナチス親衛隊司令官はおそらく1942年／43年の冬の終わり頃に、ラインハルト作戦 (*Einsatz Reinhardt*) の収容所の閉鎖と抹消を決定した

(Arad 1987 : 165-169頁)。アラド (Arad 1987 : 370-376頁) は1943年夏のベウジェツ絶滅収容所から同年11月のソビボル絶滅収容所にかけての、絶滅収容所の抹消について詳しく述べている。ナチス親衛隊は収容所の土地を平らに造成し、さらに松の幼樹を植林した。10月～11月後半には、ソビボル絶滅収容所のほぼ全てが抹消された。

ベウジェツ絶滅収容所が抹消された後の不毛の大地の何も痕跡がない写真からは、絶滅工程に関連する建造物やその他の設備の徹底的な抹消が明白である (Lachendro 2007 : 43, 64頁)。ベウジェツ絶滅収容所の撤去後、ウクライナ人の監視兵とその家族のためにそこに農場が建設され、そして同様の農場がトレ布林カ絶滅収容所とソビボル絶滅収容所の撤去後にも設立された (Arad 1987)。

絶滅収容所に関する考古学的研究にとってそのような徹底的な破壊の重要性は軽視するべきではない。ほとんどの建造物は木製の収容舎であったので、それらは他の場所でも利用されるために収容所から簡単に撤去され搬出された。ガス室は爆破によって破壊された。それゆえに、収容所の建造物の平面配置を考古学的に復元できる可能性はあまり高くない。さらには、ナチス親衛隊員達が主に廃品金属類に隠して、利用できる全ての物品類と道具類を持ち去ったであろうことは間違いない。

盗掘：絶滅収容所が撤去された直後から、ベウジェツの住民達が証言したように、貴重品を探す地元の農民達によって盗掘された (Arad 1987 : 371頁)。

「絶滅収容所の区域を平らに造成した後、ドイツ兵は松の幼樹をそれらの区域に植林して撤退した。それと同時に、金や貴重品類を探す近隣住民によって全域の金品は根こそぎ持ち去られた。そのため収容所跡の地表面全域は人骨・毛髪・死体を焼却した遺灰・義歯・陶器やその他の器物で覆われていた」

絶滅収容所跡地における盗掘は当時とても激しく、今日もなお継続しており、トレ布林カの墓荒らしのような最新で最大の事例が2002年に報告されている (Gluchowski and Kowalski 2008)。2008年10月、ソビボルにおいて、私たちが森に到着する数日前におそらく金属探知機を使用してひそかに遺灰塚 (訳注：祈念施設の一つ) の南側を盗掘した人々がいたことに私たちは気づいた。

戦後の証拠収集：絶滅収容所でナチスによって行われた虐殺への公的な調査は戦後すぐに実施された。たとえば、1945年10月に、ポーランド戦争犯罪調査委員会はベウジェツで九つの大規模な集団埋葬地を発掘調査した。焼却された非常に多数の遺体と、それらの骨の粉末がいくつも小さな塊となって土中に埋もれている証拠が発見された

(O'Neil 1998)。実施された発掘調査というのは、考古学的な作業というよりもむしろ法医学的な性質のものであった。

追悼：ここで私たちが意味する活動というのは、追悼と博物館活動の枠組みにおいて、地域の有力者によって収容所跡地で実施されたことである。そのような活動は層序と遺構・遺物を攪乱し、収容所遺跡の保存に悪影響を及ぼしているので、収容所遺跡での発掘調査の計画に際し考慮すべきである。パウリツカ＝ノヴァク (Pawlicka-Nowak 2004a : 15頁) は、ジュホフ (Rzuchów) の森のヘウムノ絶滅収容所内集団埋葬地区域における1960年代初頭の活動について、以下のように述べている。

「ブルドーザーは、伐採機とともに森を深く掘り下げて、路面を舗装し、樹木と植物を植えることで、より美しく地表を整え、その結果それまで目視できた収容所機能の痕跡を、全て破壊してしまった」

1996年に、マーティン＝ギルバード (Martin Gilbert 1997 : 250頁) とロンドン大学の学生達のグループはソビボルを訪れ (訳註：以下のことに) 気付いた。

「死体を焼却するための火葬壇 (crematorium pyres) に使用されていたレールを見つけようと試みて、最近掘り起こしを行った砂の塊があった。この作業はヴウォダヴァ (Włodawa) 地域博物館によって行われていた」

私たちの知る限りでは、ソビボル絶滅収容所で焼却作業に使用されたレールはまだ発見されていない。

絶滅収容所の考古学：概要調査

上述のように、絶滅収容所遺跡の調査や発掘はこれまでも実施されていたが、それらの作業の性質は全く考古学的ではなかった。実際に、第二次世界大戦終結後数十年経った1986年にŁ. パウリツカ＝ノヴァク (Ł. Pawlicka-Nowak) がヘウムノ収容所遺跡で発掘調査を開始するまでは、絶滅収容所の考古学的調査は実施されていなかった (Golden 2003, Pawlicka-Nowak 2004a, Pawlicka-Nowak 2004b)。

1. ヘウムノ絶滅収容所遺跡の発掘調査

ウッチ (Łódź) 地区ヘウムノ＝ナド＝ネレム (Chełmno-on-Ner) の絶滅収容所 (図1) は、二つに分かれた施設から成り立っているという点で他の絶滅収容所とは異なる

る。第一の施設は、ヘウムノ（クウムホフ：Kulmhof）村にある城館（宮殿または荘館）にユダヤ人を集め、駐車しているガストラックで殺害するものであった。被害者らの死体は、ガストラックで4 kmほど北方のジュホフ（Rzuchów）の森の空き地に運ばれた。これが第二の施設で、そこで死体は焼却され集団埋葬地に埋められた（Krakowski 1993）。ヘウムノ絶滅収容所で殺された推定被害者数は、おおよそ150,000人（Hilberg 1985：1219頁，Rückerl 1977：288-293頁）から250,000人（Krakowski 2004：15頁）の間で、さまざまな説がある。

ヘウムノ絶滅収容所遺跡の発掘調査は、1986年～1987年、1997年～2002年、2003年～2004年の3次にわたって、コニン（Konin）博物館を代表してL.パヴリツカ＝ノヴァクにより実施された。現在までに出版された報告書では、クウムホフとジュホフの森の双方の遺構・遺物について説明している（Pawlicka-Nowak 2004a, Pawlicka-Nowak 2004b）。クウムホフの城館の発掘調査でもっとも重要な発見は、地階部分の部屋と、裸にされたユダヤ人たちがガストラックに向けて行進させられた通廊の基礎が検出されたことである。多数の遺物がここで発見されていて、ヘブライ語で1940年11月29日と書かれた義歯（図3）のように、その多くはユダヤ人の所有物であった（Pawlicka-Nowak 2004b：49頁）。城館の前庭で九か所の試掘（pits）が行われ、宝飾品を含む多数の遺物が発見された（Budziarek 2004）。ユダヤ教の祭儀の備品（Judaica



図3 1940年11月29日というヘブライ語の年月日が刻まれた入歯の破片
（コニン地区博物館 L.Pawlicka-Nowak 氏提供）

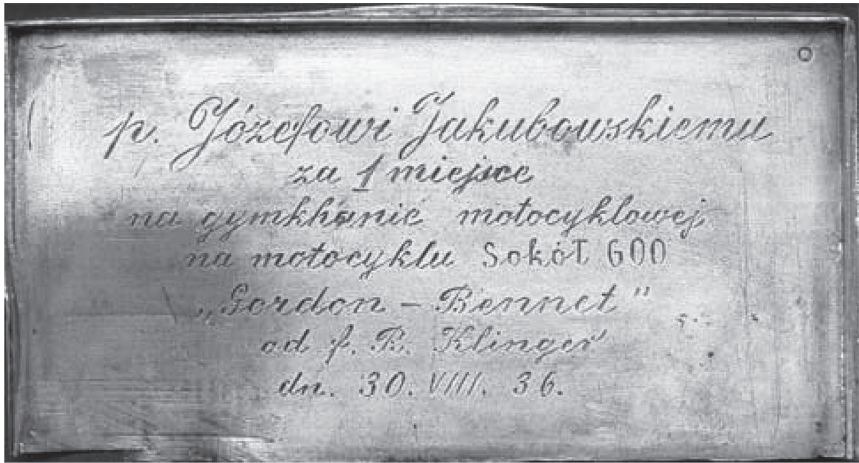


図4 ヘウムノ：第2試掘溝から出土した煙草ケースの蓋の破片。ヨセフ＝ヤクボフスキ（Józef Jakubowski）が1936年のバイクレース1位で授与された（コニン地区博物館L. Pawlicka-Nowak 氏提供）。



図5 ロンドンの帝国戦争博物館ホロコースト展示で陳列中のヘウムノ絶滅収容所遺跡出土遺物。コニン地区博物館から貸与。

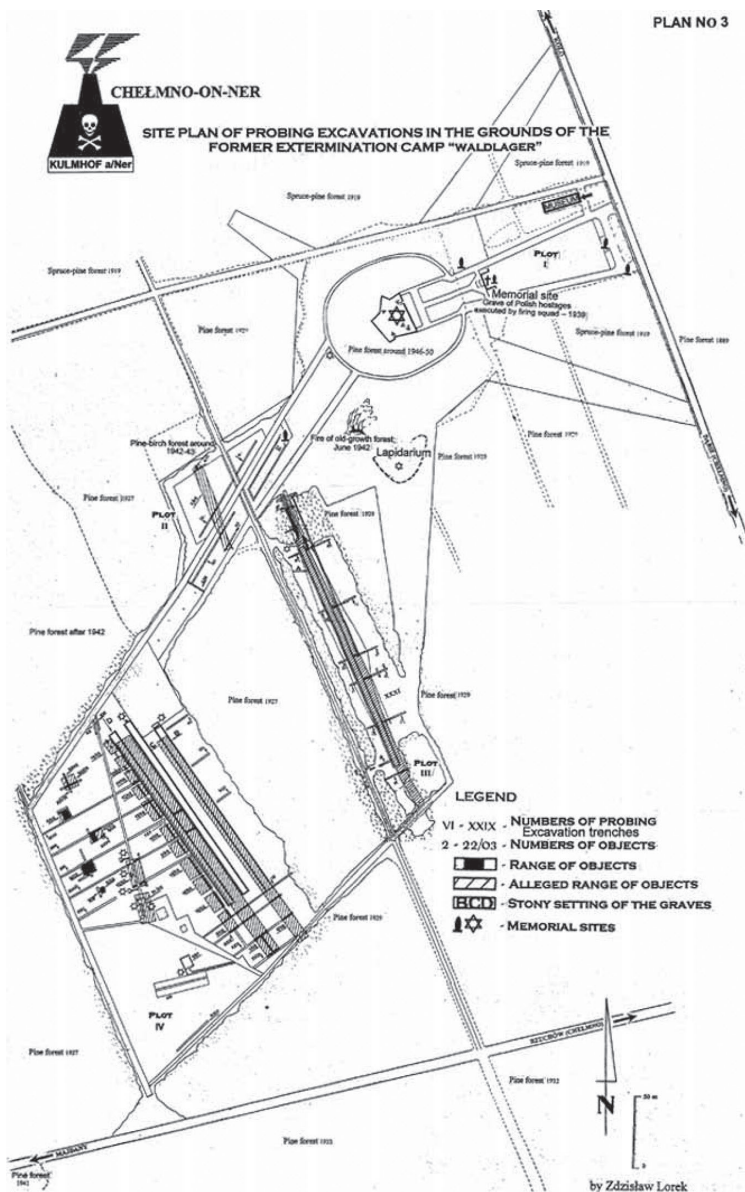


図6 ヘウムノ (Chełmno) 集団埋葬地区域のジュホフ (Rzuchów) の森の平面図 (コニン地区博物館 L. Pawlicka-Nowak 氏提供)

items) も見つかり、たとえば、第4試掘溝 (pit 4) からは「聖なる安息日 (Holy Sabbath)」とヘブライ語が刻まれたナイフや、「過越祭 (Pesach)」と刻まれたウォッカグラスなどが出土した (Pawlicka-Nowak 2004b : 54-56頁)。また、注目すべきは第2試掘溝 (pit 2) から出土した煙草ケースの蓋で (図4)、このケースにはヨセフ=ヤクボフスキ (Josef Jakubowski) が1936年のバイクレース1位で授与されたものだということが刻まれている (Pawlicka-Nowak 2004b : 53頁)。

上述した出土遺物および、出版されウェブ上でも閲覧できる報告書の中で図示されているものは、ヘウムノ絶滅収容所遺跡の多くの場所で出土した非常に多数の遺物中の限られた一部である。それらは、ボトル・注射器などのガラス製品類、カップ・皿・ボウル・銀食器などの金属でできた食器類、さらには櫛・歯ブラシ・義歯・眼鏡・靴・繊維製品などを含む。それらのうち、数百点の遺物は城館の近くにある地区博物館とロンドンにある帝国戦争博物館に展示されている (図5)。ヘウムノ絶滅収容所遺跡の発掘調査は、最も豊富な絶滅収容所遺跡の遺物コレクションをもたらしたといえる。

ジュホフの森における発掘調査 (図6) では、主に五つの集団埋葬地 (Pawlicka-Nowak 2004a : 22-24頁, Pawlicka-Nowak 2004b : 59-64頁) と、八つの「オブジェクト」が対象とされた。それらは、建造物または施設の遺構で、そのうちの四つは「野焼き場 (field furnaces)」、四つは「焼却施設 (crematoria)」として認定された (2004a : 18-21頁)。埋葬地の大きさにはばらつきがあり、奥行きは62~254m、そして幅は3~10mの間である。深さが3~4mもあるのは、第2と第5の二つの集団埋葬地だけである。それらは灰色の土、焦げた廃棄物と粉碎された人骨片で満たされていた。注目されるのは、第1集団埋葬地から出土した被害者の小形の遺物群であり、パヴリツカ=ノヴァクの指摘 (2004b : 60頁) によれば、絶滅工程の最初期段階 (1942年1月) では人々は衣類を身に着けたまま埋められていた状況を示している。

焼却施設は形態と規模が様々であるが、その内部を満たす覆土は基本的に同じで、焦げた廃棄物・遺灰および骨片を含んでおり (Pawlicka-Nowak 2004a : 19-21頁)、埋葬地の覆土と酷似している。四つの焼却施設のうち三つからは、焼却炉に新鮮な空気を供給するために用いたコンクリート管の破片や、耐火煉瓦も出土している。野焼き場は直径7~9mで深さは3~5mである。これらの覆土は焼却施設に酷似していて、コンクリート管や煉瓦を含む (Pawlicka-Nowak 2004a : 19-21頁・18-19頁)。焼

却施設は閉鎖的な建物内に位置し、野焼き場は露天の土壌であったことは明らかである。

2. ベウジェツ絶滅収容所遺跡の発掘調査

ベウジェツ (Bełżec) 絶滅収容所は、ザモシチ (Zamość) の40km南にあり、「ラインハルト作戦 (*Einsatz Reinhardt*)」による三つの絶滅収容所のうちの一つで、1942年～1943年に稼働していた (図1)。1943年の夏に死体の焼却終了後、完全に破壊された。ベウジェツ絶滅収容所で約600,000人のユダヤ人が殺害されたことはほとんどの専門家の間で意見が一致していたが、この解釈は最近見直しが迫られている (O'Neil 1999と Pohl and Witte 2001の間の論争を参照)。ベウジェツ絶滅収容所遺跡全体が大規模なメモリアル (祈念施設) になる前の1997年～1999年の間に発掘調査が実施された。発掘調査の終了後、遺跡はモニュメントを設置するために覆われ、全体が改変されて2004年に開園した (図7)。ベウジェツ絶滅収容所遺跡の発掘調査は、トルン大学のA. コラ (A. Kora) が代表する調査隊によって実施された。このポーランドの調査隊による報告書 (Kola 2000) の出版に加えて、R. オニール (R. O'Neil) もベウジェツの考古学に関する資料を出版した (O'Neil 2007, O'Neil 1998, O'Neil 2004: 15章)。

ベウジェツ絶滅収容所遺跡での考古学的調査は、ボーリング (drilling) 調査と遺構の発掘調査という、二つの方法を用いて実施された。ボーリング調査は、最大径65mmのボーリング機によって、地下6～8mの深さまで、手作業のコアリングで実施された。5×5mのグリッドが遺跡全体に設定され、各区画の角でボーリング調査を実施した。1997年～1998年に、この手法によって、2227のコアサンプルを採取し、そのうちの137のコアサンプルについて報告された (Kola 2000: 図12-16)。ボーリング調査の結果、コラは、地表下が自然土壌 (主に砂)・集団埋葬地・集団埋葬地か建造物/施設の境目の攪乱という三種類に区別されることを示した (前掲同: 70頁)。

集団埋葬地 (図8) は、深さ5m以内であり、それらの覆土は主として炭化物および死体焼却残留物から構成されている。集団埋葬地の約5分の1には、死体の分解過程で屍蠟化した状態のものも含まれる。第10号集団埋葬地 (Grave 10) は最大 (24×18m) で、最深 (5.2m) の例である。第10号集団埋葬地は、主に分解過程の死体から構成されており、4.4mの深さに石灰の層が存在する。石灰は他の集団埋葬地でも



図7 ベウジェツ（Belzec）：遺跡とモニュメント

検出されており、おそらく（訳註：死体の）分解を促すために使われたとみられる。第5号集団埋葬地も、 $32 \times 10 \times 4.5\text{m}$ の最大のものであるが、死体焼却残留物のみの層から構成されている。焼却物の覆土は自然砂によって隔たれているため、複数回の投入作業が示唆される。ボーリング調査と堆積物の分析の結果、考古学者たちは絶滅収容所が撤去されるまでに33基の集団埋葬地が存在したことを示した。コラは、集団埋葬地を二つのグループに区別しており、一つはおそらく最初期の埋葬地でベウジェツ収容所の西部と北西部に集中する21基の埋葬地から成り、その他は収容所の北東部に集中している（Kola 2000：38-40頁）。

ボーリング調査によって採取された堆積物のいくつかの事例は、埋もれた建物遺構が特定の場所に存在することを示唆した。それらを検出するためにより一般的な発掘調査方法が用いられた。発掘された八つの遺構（建物A-H）の結果に関するコラの記述によると、ほとんどの遺構の保存状態は不良で、さらにそれらに関連した出土遺

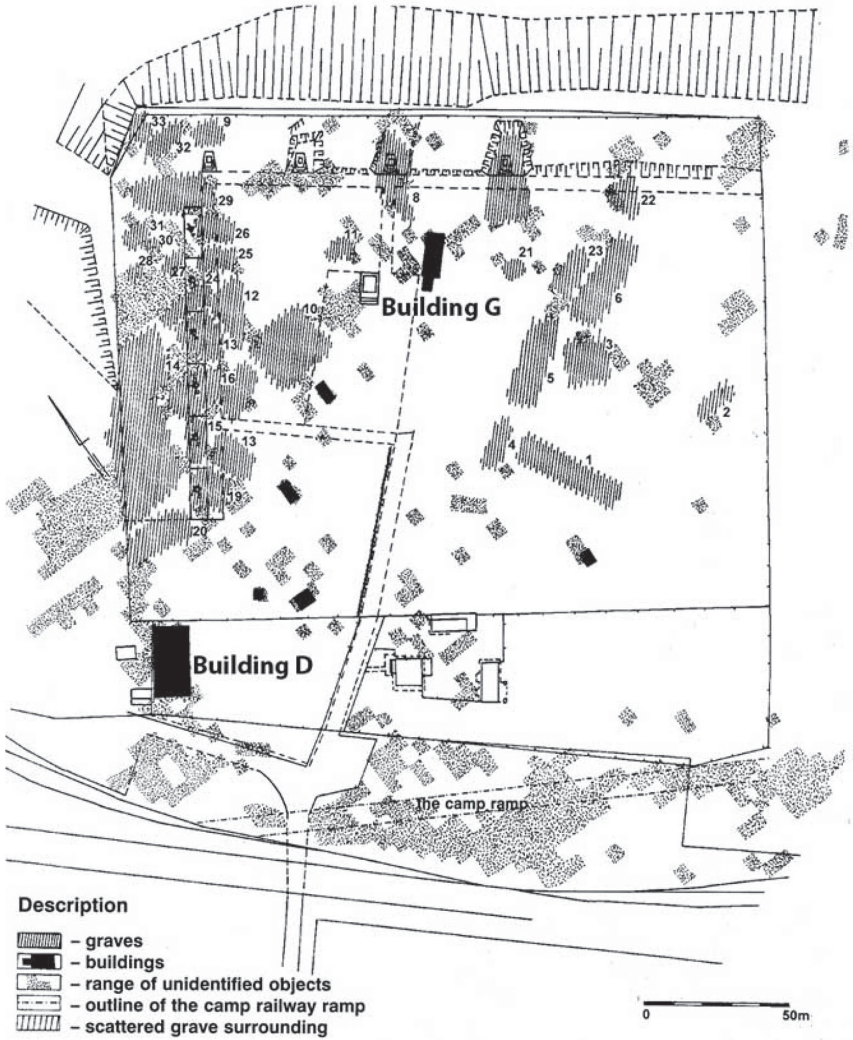


図8 ベウジェツ（Bełżec）絶滅収容所遺跡の建物遺構と集団埋葬地の平面図
（Kola 2000：図17引用）

物も乏しかった。しかしながら、建物遺構 D および G (図 8) は、コラがガス室の可能性を指摘している点で注意され、彼の意見によれば、建物 D は 1942 年 3 月～6 月の間に稼働していた初期のガス室またはそれに関連する可能性があり、建物 G は 1942 年 7 月～12 月の間に稼働していたガス室として設置されたとしている。

建物 G は、15×3.5m の長方形で、実際には木造の簡素な建物であった。タール紙・鉄の釘・義歯の破片・女性用の櫛・ポーランドのグロシュ貨幣 2 枚がそこから出土した。コラの遺構に関する解釈は明確で、「木造の建物は、おそらく収容所機能の第二段階にガス室として供されていた…このような解釈は、収容所平面図中の〔建物 G〕の位置からも確認できる」(Kola 2000: 61 頁)。第一段階のガス室とみなされている建物 D の場合は、さらに複雑である。建物 D はパウゼツ絶滅収容所の南西部に位置しており、収容所遺跡の中で最大かつ最良の保存状態の建物遺構である。大きさは 26×12m で、同じ大きさの部屋が六つあり、北側の部屋にはもともと車の修理のために使用されていた溝である「穴」が付設されている (Kola 2000: 54-58 頁)。建物 D からは、櫛の破片・薬／香水の瓶・薬莖・食器類・金属製の箱や鍋・レールの留め具類など、多数の遺物が出土した。注目に値するのは、用途不明の 304 個のコンクリート製の円盤で、直径 6 cm・厚さ 1 cm で、吊り下げるための孔があり、中央に 5 桁の数字が彫られている (Kola 2000: 図 113-115)。アルミニウム製で 4 桁の数字を伴う類似資料がヘウムノでも出土しており、その大部分がジュホフの森の第 2 集団埋葬地に伴っている (Pawlicka-Nowak 2004b: 62 頁)。

コラは、建物 G について 2 段落と 1 図を割いて説明し解釈している。対照的なことに、彼は建物 D に関しては 4 頁と 4 図を費やしているが、解釈を提示していない。報告書の結論部分 (Kola 2000: 65-69 頁) でのみ、建物 D が第一段階の死の部屋 (訳註: ガス室) だったのではないかと述べている。彼の比較的長い考察は、疑問の余地のある結論で終わっている。

「調査結果に基づくと、収容所機能の第一段階にはガス室の痕跡を確認できなかった。収容所中央部の木造の建物〔G〕の痕跡は収容所機能の第二段階のガス室の遺構として仮説的にみなされる可能性がある」(Kola 2000: 69 頁)。

建物 G が収容所機能の第二段階におけるガス室であるという指摘は、歴史的証拠と矛盾しており、したがって方法論的根拠に疑念の生じるものである。建物 G が木造であったことは間違いない。しかしながら、史料によると、収容所機能の第二段

階におけるガス室はコンクリート製であった。ベウジェツ絶滅収容所の二人の生還者のうちの一人であるレダー（Reder）によると、「ガス室を備える建物は低く、長く、広く、灰色のコンクリートで、平らな屋根はタール紙で覆われていた…」(Reder 1999: 122頁)。別の目撃者であるプファンネンシュタイエル（Pfannensstiel）はナチス武装親衛隊（Waffen SS）の衛生顧問で、1942年8月にベウジェツ絶滅収容所を訪問し、「ガス室を備えた建物はコンクリートでできていた…」(Arad 1993: 130頁に引用)と、後に述べている。コラはレダーの報告を知っていたが、「信用できない」(Kola 2000: 61頁)と決めつけ、脚注で強く否定している。報告書のまとめ部分でコラは、「建物がコンクリートでできていたというレダーの情報は、遺跡の中央部分にはコンクリート部材が点在する痕跡が認められないことから、確証を欠くとみなされる」(前掲同: 69頁)と述べている。

レダーの目撃証言（およびプファンネンシュタイエルの証言）を完全に否定することは方法論的にも問題なため、この点は歴史考古学の枠組みの中で検討することが有益である。歴史考古学者が直面する課題の一つは、考古遺物／文字記録の対立性であると一般的に理解されている。それらが一致していれば、過去の物事の復元はより適切であるが、明白な（または強く主張される）矛盾がある場合はどうであろうか。もし矛盾が明白で現実的であれば、私たちは、考古遺物と文字記録の間または内部にある「不一致」の空白に関して議論することで、これまで知られていなかった追加的な観点を示すことができるであろう (Galloway 2006: 42-44頁)。しかしながら、考古学と歴史学の情報の間に、証拠の性質と特質に関して不一致が存在することを証明するためには、注意深く再検証すべきである。コラは、レダーやプファンネンシュタイエルの信用性、あるいは彼らの目撃の実行可能性を否定するための前提となる検証を行っていない。レダーとプファンネンシュタイエルの証言について私たちが批判的に再検証する必要はなく、それらは専門の歴史学研究者に任せるべきである。しかしながら、私たちは考古学的証拠と解釈に関しては、もちろん批評可能である。

コラの解釈は二つの議論に基づいている。第一に、建物 G が集団埋葬地の近くに位置する事実である。目撃者の視界の距離からは、ガス室は建物 G の西または南20～30m の位置で、集団埋葬地からもなお近い場所にある (図8) (Kola 2000: 図17)。第二に、タール紙に関する議論である。コラは建物 G においてタール紙が発見されたという事実に基づいて、レダーが新しいガス室の屋根におけるタール紙について指

摘していることから、建物Gをガス室だとしている（前掲同：69頁）。私たちはリーダーの特別な目撃証言を信用しない理由はないが、同時にタール紙がガス室に限定して使用されていたことを意味するものではないと考える。対照的に、概してポーランドにおける兵舎や、さらにはナチスの特に強制および絶滅収容所の木造収容舎に、タール紙が集中的に使用されていたという多くの証言がある。たとえばトレブリンカ絶滅収容所では、生還者のサミュエル＝ヴィレンベルグ（Samuel Willenberg）が、「収容所の他の建物と同様に、ドイツ兵は新しい建物の屋根にしっかりと組み合わせるようにタール紙を打ちつけることを私たちに命じた」（Willenberg 1992：139頁）と、記している。タール紙はベウジェツ絶滅収容所に搬入されてきて、木造の建物の屋根を覆うことに使われた可能性が高く、したがって建物Gはそのような建物遺構だと考えられる。タール紙で覆われたような木造の建物が多くあったので、建物Gが毒ガス施設を伴うものであったという主張は立証できない。考古学的にガス室を認定する課題については、ソビボル絶滅収容所における最近の調査に関連づけながら以下に論じる。

3. 2000年～2001年のソビボル絶滅収容所遺跡の発掘調査

A. コラ（A. Kola）を代表とする調査隊は、2000年～2001年にソビボル絶滅収容所遺跡の発掘調査を行った（Kola 2001）。考古学者たちはベウジェツ絶滅収容所遺跡で採用された同じ方法で発掘調査を行った。ボーリング調査によって、彼らは七つの集団埋葬地の輪郭を明らかにし、五つの建造物／施設（「オブジェクト」）の遺構を検出した。この調査結果が、私たちが2007年にソビボル絶滅収容所遺跡で発掘調査を行うための議論の背景になっている。

ソビボル絶滅収容所遺跡における最近の調査の概要

1. ソビボル絶滅収容所の歴史と構造

ソビボル（Sobibór）絶滅収容所の（ベウジェツ Bełżec 絶滅収容所およびトレブリンカ Treblinka 絶滅収容所も同様に）戦時中の史料は乏しいが、それらの類型と内容はブラウニング（Browning 1999および以下参照）によって要約されている。最近イギリスのキュー（Kew）にある公文書館が機密解除を行った、いわゆるヘフレ電報（Höfle Telegram）（Witte and Tyas 2001）が重要な証拠として加わった。この電報は、

1943年1月11日に、ナチス親衛隊指揮官ヘフレ (Höfle) から、ナチス親衛隊中佐アイヒマン (訳註：アドルフ＝オットー＝アイヒマン Adolf Otto Eichmann) および同ハイム (訳註：アリバルト＝ハイム Aribert Heim) へ送られた電報で、それをイギリス諜報機関が傍受し、解読したものである。その短い電報は、「ラインハルト作戦 (Einsatz Reinhardt)」の絶滅収容所において、1942年の暮れまでに実施された虐殺人数を列記している。各絶滅収容所におけるユダヤ人たちの殺害人数を唯一列記しているという事実が重要である。この史料によると、ソビボルでは101,370人、ベウジェツでは434,508人、トレ布林カでは713,555人が虐殺されている (Witte and Tyas 2001 : 469-470頁)。

私たちの調査概要では、ソビボル絶滅収容所の歴史と空間構造に関して、アラド (Arad 1987)・リュッカール (Rücklerl 1977)・シェルビス (Schelvis 2007) らの研究に多くを拠っている。ソビボル絶滅収容所の建設は1942年3月から開始され、最初の (訳註：ユダヤ人らを積載した) 貨物列車は1942年5月初めに到着した。1942年8月に線路の修理のため絶滅作業は一時中断された。この中断によって収容所の構成要素は改変され、新しいガス室が建設された。改変が終了した1942年10月、絶滅作業は再開した。1943年の2・3月に、ヒムラー (Himmler) はソビボルを訪問し、ラインハルト作戦の収容所を隠滅することを決定した。しかしながら、数か月後の7月上旬にヒムラーは、ソビボルを強制収容所および捕獲弾薬類保管倉庫に改変することを決定した。この目的のために、ソビボル絶滅収容所の一部である第Ⅳ収容区または「北収容区」における建物の建設が直ちに開始された。1943年の10月14日、収容者が反乱を起こし約300人の捕虜が脱出した。(訳註：そのうち) 約50人は戦争を生き抜いた。ソビボルを弾薬庫として使用する計画は中止され、1943年の11月に収容所は跡形もなく抹消された。170,000人 (Schelvis 2007 : 198頁)~250,000人 (Arad 1987 : 177頁) のユダヤ人がソビボル絶滅収容所で虐殺されたと見積もられている。

ソビボルは、五つの収容区から成り立っており、収容区一帯は有刺鉄線と地雷原で取り囲まれている (図9)。最初 (訳註：の収容区) は、ウクライナ人補充兵およびナチス親衛隊の兵舎や住宅を伴う収容所前面区 (Vorlager) である。収容所前面区の重要な建物は、指揮官の住宅であった。ソビボル絶滅収容所での虐殺における「コンペヤーベルト」工程 (Hilberg 1985 : 967-976頁) は、収容所前面区に面した降車場から開始された。降車場で下車させられたユダヤ人たちは、再定住する場所へ向かう

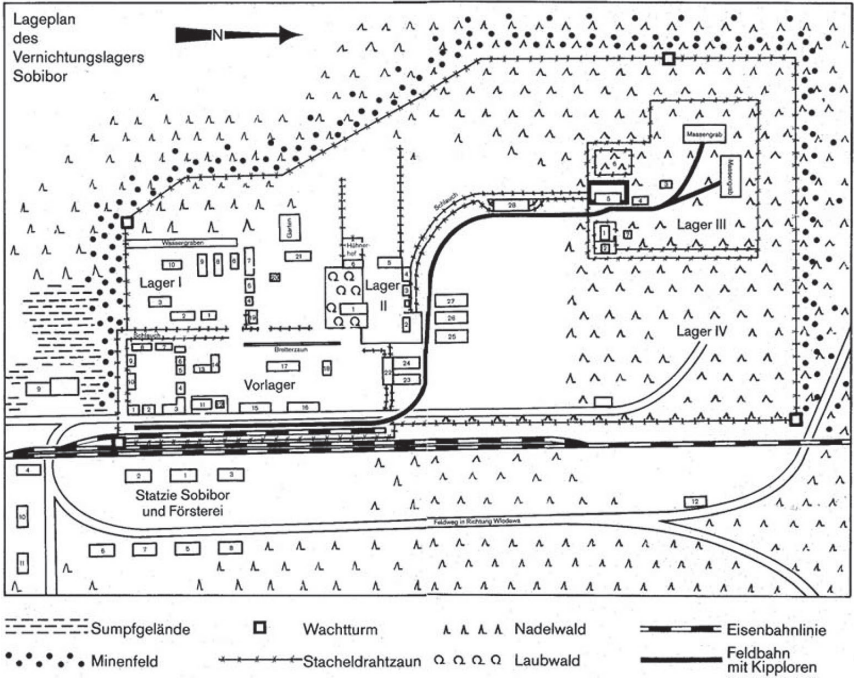


図9 E.パウアー (E. Bauer) によるソビボル絶滅収容所の平面図
 出典：(Rückerl 1977：160-161頁)

途中で、入浴をする中継収容所に到着したと言われた。病人と老人は選別され、「隔離病棟 (Lazaret)」に連行され、すぐに銃殺された。その他のユダヤ人は、降車場で手荷物を置き、収容所前面区北部にある第Ⅱ収容区で衣類を剥ぎ取られ、個人の所有物はすべて収奪された。第Ⅱ収容区の倉庫群では、収容所前面区の北、かつ第Ⅱ収容区の南にある第Ⅰ収容区に収容されていたユダヤ人の奴隷労働者たちによって、収奪品の分類・梱包・処置・結束が行われた。

裸にされた被害者たちは、木の枝をからませた有刺鉄線の高い柵によって第Ⅰ収容区と第Ⅱ収容区から遮蔽されていた通路を経由して、第Ⅱ収容区から第Ⅲ収容区へ残忍に追い立てられた。この通路は、「パイプ道 (Schlauch)」, もしくは第Ⅲ収容区 (図9) のガス室が終点である「天国への道 (Himmelfahrtsstrasse)」として知られる。男

性は直接ガス室へ追い込まれた。女性たちは、最初に「天国への道」の短い脇道を経由して入口近くの兵舎に向かい、毛髪を刈り取られ、ガス室に送られた。ガス室が被害者で満員となったのち、約20～30分間で被害者らを窒息死させるためにガスを室内に注入した。埋められる前の死体からは、価値のあるものや金歯が検査・回収された。作戦の最初期段階では、約80,000体の死体が大規模な土壌に埋められた。1942年秋には、異なる死体処理の方法が導入された。死体は、狭軌道運搬車によって、ガス室から古い鉄道のレールで組まれた焼き網へ、焼却のため運ばれた。焼却後、大きめの骨の破片を砕いたのち、その遺灰は土壌に埋めた。集団埋葬地は第Ⅲ収容区にあり、ガス室に隣接していた。第Ⅲ収容区も、ガス室と焼き場で労働させられ誰一人生き残らなかったユダヤ人奴隷たちの収容舎、さらにはウクライナ人補充兵たちの兵舎を含んでいた。五番目の収容区である第Ⅳ収容区は、すでに上述したがさらに以下に詳細を検討する。

2. 史料的背景

現存する数少ない公文書の中には、考古学に関連するたとえば建造物・配置・遺物などのソビボル絶滅収容所の物質的要素に言及しているものはない。1942年の初春にルブリン (Lublin) において、ラインハルト作戦の司令官オディオ＝グロボクニク (Odilo Globocnik) が、最初のソビボル絶滅収容所司令官フランツ＝シュタングル (Franz Stangl) に見せたソビボル絶滅収容所の設計図のような文書が、かつて存在したことは確かである (Sereny 1983 : 103頁)。ドイツ人隊員の証言も簡略で、ナチス親衛隊員たちは細部の特徴についてはほとんど説明できなかったが、ソビボル絶滅収容所とその五つの収容区の平面配置については一般的な言及をしている。1942年4月からの初期のガス室の構造は、いくつかの断片的な文章で述べられている。「…線路と駅の近くで、コンクリート製の建造物のある一区画の土地と他にも頑丈な建物が見えた…私たちはコンクリートの基礎の上にエンジンを設置した…」(ソビボル絶滅収容所に最初のガス室のエンジンを設置したナチス親衛隊員の E. フックス E. Fuchs の証言, Arad 1987 : 31頁より)。シュタングルは、ソビボル絶滅収容所の最初の司令官であるが、個別の建物についてはほとんど言及していない。上述のとおり、彼はソビボルの建設当時の設計図面に精通しており、建設にも参加している。建設過程について彼が唯一構造について言及しているのは「…新しいレンガ造りの建物には三つの部

屋があり、3×4mで…まるでハルトハイム城 (Schloss Hartheim) (訳註：ナチスのT4作戦に基づく障害者の虐殺「安楽死」が実行されたオーストリアの城) のガス室によく似ていた」(Sereny 1983:109頁)。しかしながら、「ガス室の名人 (Gasmeister)」として知られるE.バウアー (E. Bauer) による別の証言では、「ガス室はすでにそこにあり、コンクリートの基礎の上に木造 [原文ママ] の建物で…」と述べられている (Schelvis 2007:101頁より)。

生存者の記憶は、ソビボル絶滅収容所の歴史学と考古学を理解するために不可欠な、一連の重要な史料を構成している。近年回想録の集成が増加していることは注目に値する。一例として、ヴウォダヴァ＝ソビボル博物館 (Włodawa-Sobibór museum) は最近一連の回想録を出版しているが、そのうちのいくつかはすでに以前にも出版されている (Blatt 2008, Ticho 2008, Wewryk 2008, Zielinski 2008)。その他にも、ソビボル絶滅収容所の生還者によって執筆された追加の回想録・証言集および研究書も数十年前と同様に最近も出版されている (Blatt 1997b, Freiberg 2007, Novitch 1980, Rashke 1995, Schelvis 2007)。ブラウニング (Browning 1999) はこう指摘する。

「…人間の記憶は不完全である。ベウジェツ絶滅収容所・ソビボル絶滅収容所・トレプリンカ絶滅収容所での事件の生還者と他の目撃者の証言は、過去の他の事件の目撃者の証言と同様に、忘却・思い違い・誇張・歪曲および心理的抑圧の影響を受けないわけではない…しかしながら、議論の論点として例外なく全て一致しているのは、すなわちベウジェツ絶滅収容所・ソビボル絶滅収容所・トレプリンカ絶滅収容所が死の収容所であったということだ…」

ブラウニングが列挙した人間の記憶の問題は、考古学において非常に重要な、空間・建造物・遺物に関する記憶にも同様に影響を与える。1943年の暮れにソビボルを去った加害者と数十人の生還者たちは、数十年後のその場所にほんのわずかな人のみが再訪できた。地元民は収容所の内部構造を熟知しておらず、訪れることができたのは収容所区域がすべて均され植林された直後であった。生還者にとって、収容所が抹消されて数十年経た現在のソビボルの森を歩いて特定の場所を認識することは容易ではなく、建造物の向きなども認識できない。1972年にソビボルを訪れたギッタ＝セレニー (Gitta Sereny 1983:117頁) が遺灰塚 (訳註：祈念施設の一つ) をソビボルのガス室があった位置とし、マーティン＝ギルバート (Martin Gilbert 1997:250頁) が、ガス室の位置を遺灰塚から100m以上南に離れた記念碑のある場所に比定しているの

もこのためであろう。

画像・主に写真・地図・設計図・航空写真は、貴重な史料であり、それらの潜在価値はまだ十分に活用されていない。第二次世界大戦の他の事例の歴史記録と同様に、ソビボル絶滅収容所に関する画像はほとんどない。実際に、1942年3月～1943年11月にかけてのいくつかの写真があるが、それらは収容所遺跡の考古学調査には十分に活用されていない。書籍や論文中でのソビボル絶滅収容所の写真はとても稀で、大部分の画像は Ghetto Fighters House (GFH) のウェブ上における画像集から入手できる (<http://www.infocentres.co.il/gfh>)。ここにある第二次世界大戦の写真のほとんどは質が悪く、その出所や信憑性が確かなものばかりではない。

ドイツ空軍 (*Luftwaffe*) によって撮影されたソビボル絶滅収容所の二点の航空写真は重要であり、一点目は1940年の絶滅収容所建設以前 (図10)、二点目は1944年の収容所抹消・植林後 (図11) のものである。最近の航空写真 (例：2005年) の現在森林化された地表 (下記参照) は、1940年と1944年の写真にみられる、古い遺構の位置を特定する手段となる。

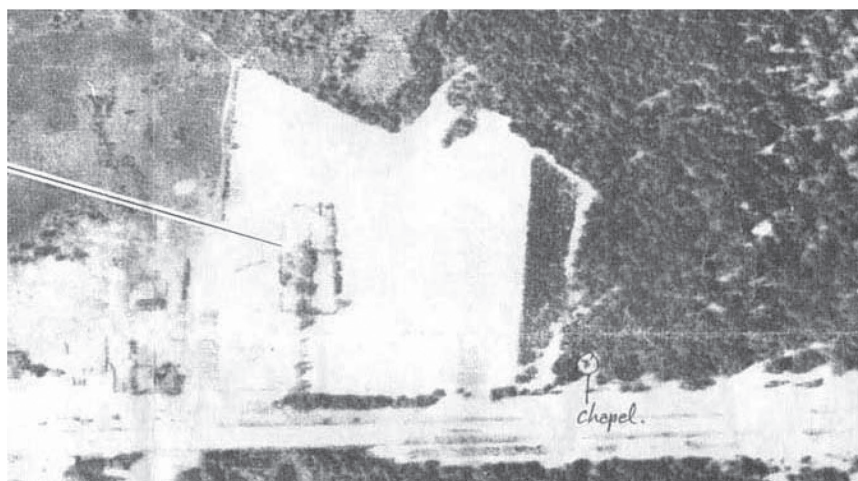


図10 1940年のソビボル絶滅収容所予定地の航空写真 出典：(ARC www.deathcamps.org, <http://www.deathcamps.org/sobibor/pic/bmap16.jpg>)

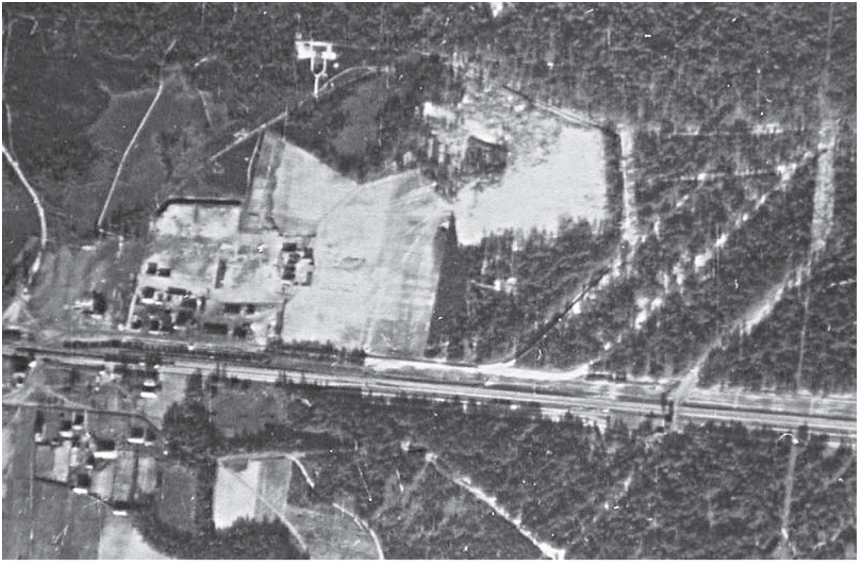


図11 1944年のソビボルの航空写真（ワシントンD.C.国立公文書館；Alex Bay氏提供）

3. 2001年のソビボル絶滅収容所遺跡における発掘調査

上述の通り、ソビボル絶滅収容所遺跡は2001年にA. コラ（A. Kola）が率いる調査隊によって発掘調査された（Kola 2001）。考古学者たちは1997年～1999年にかけてベウジェツ絶滅収容所遺跡で行われた発掘調査と同様の方法を採用した。二つの主要な遺構群が発見されており（図12）、（訳註：第一に）遺灰塚の周囲をとりまく区域に様々な大きさの7基の集団埋葬地と、そして（訳註：第二に）それらの南側、モニュメントのあるアスファルトで舗装された一画の西側で数基の建物遺構が検出された。建物Eは検出された建物群の中で最大かつ最も重要である。長さ約60mで、調査範囲の南西部に位置する。（訳註：この建物Eは）虐殺被害者の衣類と所持品を収奪する作業を行う脱衣室として解釈された（Kola 2001：121頁）。建物Eについては、次節でさらに検討する。現時点では、収容所遺跡の将来活用に関する現在の計画においてこの考古学的遺構がガス室として解釈された（Bem 2006）ことが注目に値する。

4. 2007年度調査

2007年10月に、私たちがおおよそガス室があるとみなしている場所である、コラが指摘する建物Eの西に隣接する境界地で最初の発掘調査の実施を決定した。私たちはコラの調査区に対応する5×5m四方のグリッドで作業し、出土したすべての堆積物を篩い分け、刷毛を用いて検出面を清掃した。私たちが取り上げた堆積物は、遺

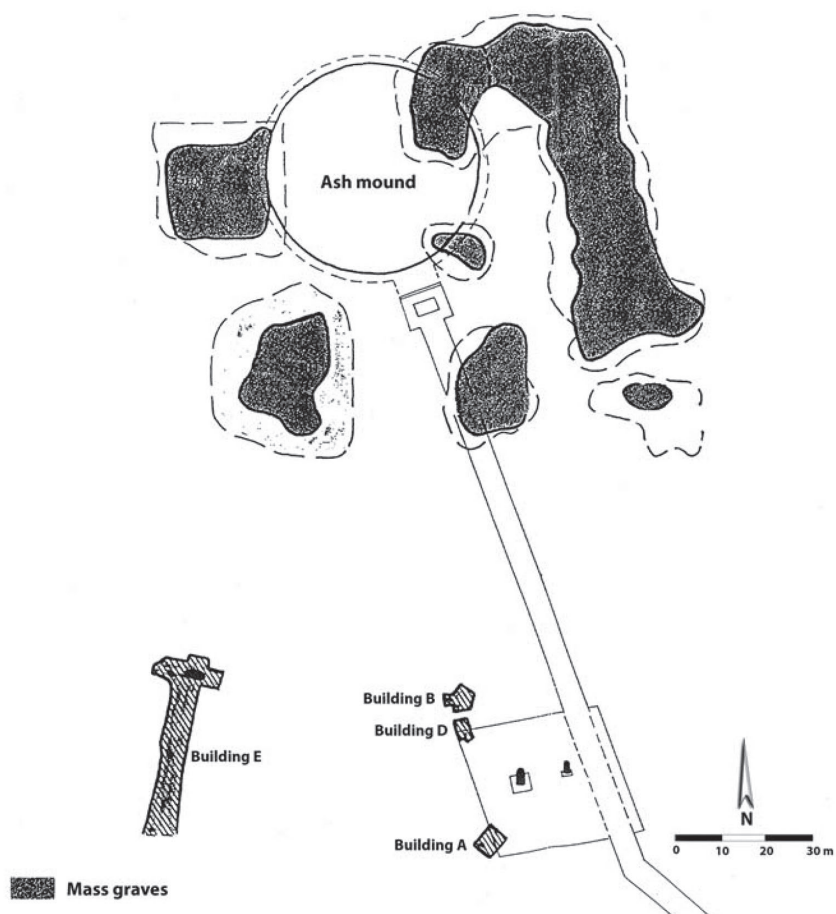


図12 2000～2001年度ソビボル絶滅収容所遺跡発掘調査平面図 出典：(Kola 2001：122頁)



図13 2007年度ソビボル絶滅収容所遺跡発掘調査：遺構F



図14 2007年度ソビボル絶滅収容所遺跡発掘調査：警備フェンス用の棘（Yehudit Heymans 撮影）

灰と被熱した物質および遺物が多量に混在した砂であった。深さは約10cmで、最下層には自然砂層が堆積していた。考古学的堆積とそれに包含される遺物の諸型式の多彩さと性質からは、私たちが発掘調査したソビボル絶滅収容所遺跡の区域がガス室でも脱衣室でもないことを示している。

私たちが検出した中で最重要の遺構は、並行する二つの黒色の線（遺構F）であり、それらは黒色および灰色の遺灰、焼けた木片、同様におそらく遺灰である白色の物質などである（図13）。私たちがこの遺構から警備フェンス用の棘（図14）を発見したという事実は、これらの遺構が収容所の柵の痕跡である可能性を裏付けている。



図15 2007年度ソビボル絶滅収容所遺跡発掘調査：煙草ケースの破片

私たちはガス室とは無関係と思われる約1,000点の遺物を取り上げた。多様な素材で作られた広範な種類の遺物が含まれている。ほとんどが金属製の遺物であった。警備フェンス用の棘に加えて、有刺鉄線の断片や、同様に釘類や狭軌道の留め釘が見つかっている。銃弾と葉莖もまた出土しており、そのうちの一つには、製造年が1938年と刻まれていた。銃弾は火熱により変形していた。また、扉の鍵の部品・はさみ・ナイフ・スプーン・ベルトのバックル・煙草用ライター・金属製の煙草ケースの破片（図15）も注目に値する。ガラス製工芸品も多く、瓶や容器などの破片も多数あった。小さな瓶の多くはおそらく香水や薬の容器であったが、大きな容器のいくつかはオランダ製の消毒薬容器であった可能性がある。入歯の破片と眼鏡のレンズ（glasses）も出土した。

同様の遺物群は他の絶滅収容所遺跡でも回収されている。たとえば、多数のはさみ・ナイフ・スプーンがベウジェツ絶滅収容所遺跡から報告されている（Kola 2000：図86-88,93,112-114,11）。ガラス製の瓶や容器は、ベウジェツ絶滅収容所遺跡でも一般的で（Kola 2000：図90-91）、そこでは煙草ケースもまた出土している（前掲同：95,97頁）。ヘウムノ絶滅収容所遺跡からも同様の遺物が知られている。ヘウムノ絶滅収容所遺跡の遺物群としては、宝石類や煙草ケース（上記参照、図4）のような独自の品目が報告されている（Pawlicka-Nowak 2004b）が、たとえば、食卓用金物・釘・皿・ガラス製の瓶と容器などの日用品遺物も同様に多数出土している。上述の通り、ヘウムノの博物館やロンドンの帝国戦争博物館（上記参照、図5）には、多数のそのような遺物が展示されている。

5. 2008年に得られた地球物理学的証拠

2008年7月のうち一週間の調査は、地球物理学的データの取得にあてられた。本研究は Worley Parsons Resources and Energy 社（Calgary）のポール＝バウマン（Paul Bauman）とブラド＝ハンセン（Brad Hansen）、そして南フロリダ大学のフィリップ＝リーダー（Phillip Reeder）の指導のもとに実施された。地球物理学調査隊は、ハートフォード大学のリチャード＝フロイント（Richard Freund）によって組織され編成された。EM61 高分解能金属検出器（EM61 High Resolution Metal Detection）・GEM19 Overhauser GPS 磁気勾配計測器（GEM19 Overhauser GPS Magnetic Gradiometer）・EM38 地形導電率計（EM38 Terrain Conductivity Meter）・地中探査レーダー（Ground Pene-



図16 2008年度ソビボル絶滅収容所遺跡調査：植生の深緑色の色調によって特定される遺灰塚周囲の広場にある集団埋葬地の範囲（Worley Parsons 社 Paul Bauman 氏提供）。

trating Radar)・低高度高解像度航空写真 (Low Altitude High Resolution Aerial Photography)・GPS 地図作成 (GPS Mapping) などの方法を用いてデータを取得した (Bauman 2008)。

地球物理学的調査は、遺跡内の以下の二つの区域で実施した。集団埋葬地のある遺灰塚モニュメント（訳註：祈念施設）南側の広場と、2007年に私たちが発掘調査をした調査区のすぐ東側と南側に設定した、8地点の各20×20m 四方においてである。加えて、低高度航空写真の撮影を収容所遺跡の本来の区域の主要部分において実施した。GPS データは収容所遺跡のさまざまな地点およびソビボルの駅と降車場で取得した。結果は現在測定中であるが、考古学的潜在価値は他の地点でも認められる (Bauman 2008)。遺灰塚モニュメントのすぐ南側の広場は、気象観測気球から撮影した低空写真においても明瞭である (図16)。その広場の集団埋葬地の輪郭線は、植生の深緑の色調の差によって明らかである。これは、コラの調査隊が行った2001年のボーリング調査の結論を裏付ける (図17)。この結論は、暫定的に特定された集団埋葬地を横断して測定されるいくつかの地中探査レーダー断面図の処理によって、さら

に補強できる可能性がある。航空写真からも、森林の均一性と樹冠の鮮明かつ微妙な違いによって、ソビボル絶滅収容所の区域は周囲の森から明瞭に区別できる (Bau-
man 2008 : 9 頁)。

6. 考 察

私たちはブラウニング (Browning 1999) のように、考古学的存在としてのソビボル絶滅収容所遺跡の空間的特徴に関して、入手できる情報に内在する見解の不一致について上述した。設計者と建築者によって描かれた収容所の最初の設計図面は未発見か、またはすでに失われていると思われる。しかしながら、シュタンゲルが言及しているように、確かにそのような設計図面は存在していた (Sereny 1983 : 103 頁)。ソビボル絶滅収容所の設計図面は将来再発見されるかもしれないが、それまではソビボル絶滅収容所の再現は数十年後の記憶によって描かれた平面図に依拠するよりほかない。今日知られているソビボル絶滅収容所の平面図は、戦後のポーランドの調査委員会によって製作されたもの (Lukaszkiwicz 1947) から、最近のラザフォード (Rutherford 2002) の平面図やソビボルメモリアル地図 (Bem 2006) まで、約20種類の異なるものが知られる。最近の調査では、特に旧ソヴィエト連邦の歴史記録である新たな平面図が確認されている。たとえば、最近私たちは、反乱の直前にソビボル絶滅収容所から脱出した二人のウクライナ人補充兵によって描かれた、1944年のソビボル絶滅収容所の平面図を調査した。その平面図の複製は、ヤド=ヴァシェム (Yad Vashem) の文書館が所蔵していた。

その異なる平面図の関係を評価することは容易ではない。その問題を部分的に解決するために、私たちは ImageSat International 社の厚意により提供されたもっとも最近の写真である2005年の航空写真 (図16 [訳註 : おそらく図17の誤記]) を平面図に投影することによって比較した。航空写真上では、収容所に至るアスファルト舗装道路、ヘウム-ヴウォダヴァ (Chełm-Włodawa) 間鉄道本線と、ソビボル絶滅収容所降車場につながる引き込み線はかなり明瞭である。その降車場に面している司令官の家もまた、ソビボルの主要な建物やモニュメント類と同様に明瞭である。絶滅収容所のすべての図面では、主要線路・線路の引き込み線・道路と降車場が特徴づけられているため、私たちはおおまかに補正投影できる。

1947年のソビボルの平面図 (図18) は、ポーランドのヒトラー犯罪調査委員会が、

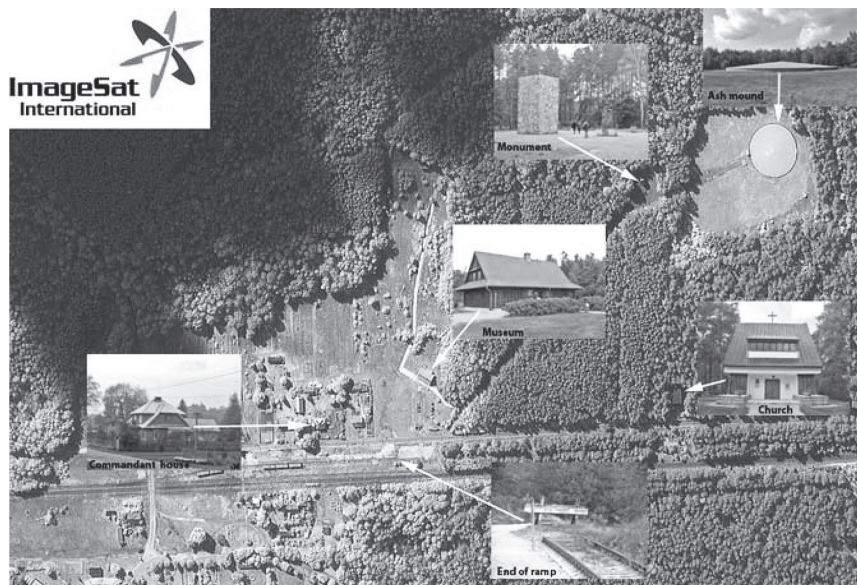


図17 ソビボル絶滅収容所遺跡とその主要施設の最近の航空写真
(ImageSat International 社提供航空写真)

現地視察と地元住民の証言に基づいて作成したものである。疑いなく今日よりも収容所遺跡は攪乱されておらず、記憶も新鮮であった。しかしながら、今日使用される他のすべての平面図とは異なっている。後の平面図にみられる最大の違いの一つは、1947年の平面図よりもガス室が約200m 北東に位置していることである。これは、第Ⅲ収容区の特徴を疑いなく熟知している「ガスマイスター」のE.パウアーによる1960年代半ばの平面図(図9)を、1947年の平面図と比較することで明白である(Rückerl 1977 : 160-161頁)。パウアーの平面図以後、主に1980年代と1990年代のいくつかの平面図では、細部が変更されている(Arad 1987 : 34-35頁, Blatt 1997a : XXIV-XXV, Schelvis 2007 : 図版24)。主として2000年代以降の最近の平面図は、収容所遺跡の大きさとガス室の位置という二つの点で異なっている(Bem 2006, Rutherford 2002)。絶滅収容所の範囲の適切な特定が可能になった変化は、1940年と1944年の航空写真の公開による。ソビボル絶滅収容所遺跡が、2000年代以前の平面図で示されたものよりも大規模なものであったことが現在では明らかになっている。



図18 ImageSat 社の現代の航空写真上に投影したソビボル絶滅収容所の1947年の平面図
出典：(Lukasziewicz 1947)

ガス室の推定位置の変遷は、概して絶滅収容所の考古学にとって考慮すべき方法的問題に関わるために重要である。上述したように、コラの発掘調査中に発見された最も重要な遺構は建物Eである。コラはこの遺構が脱衣室であることを示唆していた (Kola 2001) が、その後の復元ではガス室として示されている。ソビボル絶滅収容所遺跡の解説小冊子 (Bem 2006) には、「ソビボル死の収容所メモリアル地図 (Sobibór Death Camp Memorial Map)」と名付けられた地図が収録されている。その地図では、絶滅収容所遺跡に現在ある建物とモニュメント類を組み合わせ、それらの背景に推定復元を重ね合わせている (図19)。「メモリアル地図」は、コラの見解では脱衣所施設群とみなしている建物Eをソビボル絶滅収容所のガス室だと示している。ラザフォード (Rutherford 2002) もこの地図のガス室の位置を追認しているが、彼が復元した建物の形態は地図とは異なっている。ガス室の位置は解決されるべき複雑な

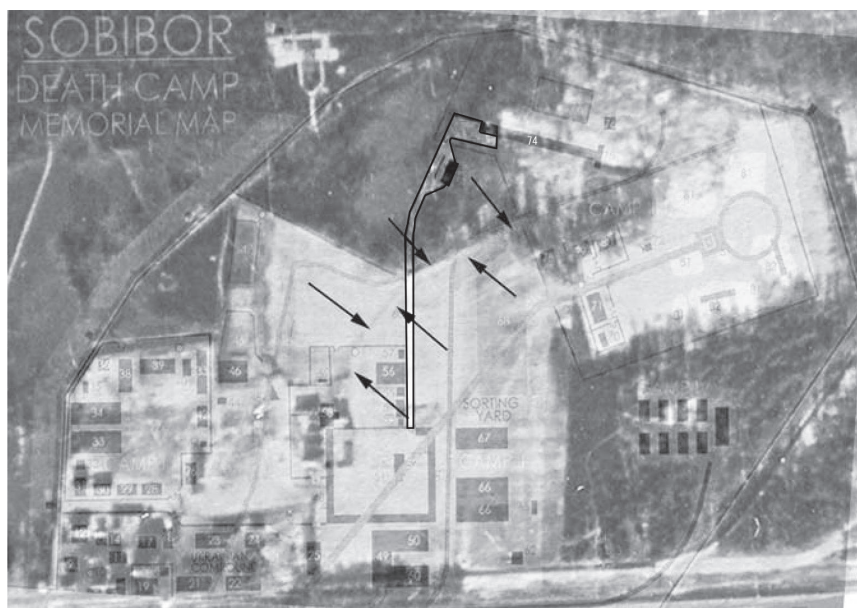


図19 1944年の航空写真において「天国への道」として識別できる可能性のある通路痕跡（黒矢印で挟まれた間）と、ガス室推定地（建物74）が終着点となる「天国への道」（青色，訳註：太黒線）が示唆された「メモリアル地図」（Bem 2006）

問題であり、ソビボル絶滅収容所遺跡における考古学的調査の将来の主要な課題であることは明らかである。

1947年の平面図は、もう一つの未解決の空間考古学的課題を検討するための原点である。この平面図（図18）によると、ガス室と集団埋葬地からなる複合施設の北にフェンスによって分離された約200×130mの空間は、「労働者収容区」および「作業場」として識別される。このような施設は、私たちがよく知るこれ以降の平面図には含まれていない。しかしながら、この施設は第Ⅳ収容区の別称である「北収容区」を想起させる。上述したように、この収容区は1943年夏の数か月間、反乱前には捕獲された弾薬類を納めるための倉庫として機能していた。現在入手できる平面図のうち、下記に言及するものを除けば、「北収容区」は第Ⅲ収容区の東、礼拝堂と「隔離病棟（Lazaret）」の西に位置する。実際に、第Ⅰと第Ⅱ収容区の収容者の視点からは、彼

らの北側に二つの収容区があり、(訳註：それは)北西の第Ⅲ収容区と北東の第Ⅳ収容区であった。それゆえに、第Ⅳ収容区に限った別称として「北収容区」という用語を使用することは、特に再考に値する。さらには、ソビボル絶滅収容所最北端の労働者収容区遺構が1945年～1946年に識別できたのであれば、これらは第Ⅳ収容区の遺構であった可能性があり、「北収容区」とも記載できたであろう。アレックス＝ベイ (Alex Bay 私信による) は、現在航空写真を用いて集団埋葬地の北側の建物遺構の位置を特定しようとしており、これは第Ⅳ収容区の手がかりとなりうる。

それでもなお、第Ⅳ収容区の現在の推定地を、西側の第Ⅲ収容区と東側の礼拝堂の間とみなす意見を容易には却下すべきでない。それは、数ある事項の中でも、ソビボルの歴史において大変有名な二人の人物であるエーリッヒ＝バウアー (Erich Bauer) とアレクサンドル＝ペチェルスキー (Alexander Pechersky) によって描かれた平面図が根拠となっているからである。ナチス親衛隊 (SS) 員のエーリッヒ＝バウアーは、ハーゲン (Hagen) 裁判によって「信頼できる」目撃者であるとみなされた (Schelvis 2007 : 247頁)。彼はソビボルで約一年半勤務し、反乱の数日前はトラック運転手だった。彼はソビボルの各所について熟知していたはずである。ペチェルスキーが描いた平面図と計画でも、第Ⅳ収容区は第Ⅲ収容区の東に位置している。ペチェルスキーは第Ⅳ収容区で働いていたが (Schelvis 2007 : 93頁)、ソビボルの反乱を計画し、それを率いたので、おそらく土地勘に優れていたはずである。ペチェルスキーによる第Ⅳ収容区の位置にはより複雑な問題があり、「エンサイクロペディア＝ジュダイカ (Encyclopaedia Judaica)」で掲載されている地図では、第Ⅳ収容区は第Ⅲ収容区の北に位置しているが、その地図はペチェルスキーにより描かれたものを基にしておりとされているからである (Dombrowska and Berenbaum, 2007 : 701頁)。破壊された建造物や壕の遺構を特徴とする集団埋葬地の北側の区域と、遺跡のその部分の考古学的研究は、ソビボル絶滅収容所の平面配置と歴史の解明により一層貢献できるであろう。

結 論

ナチスの四箇所の絶滅収容所に関して得られている考古学的知見はごくわずかである。トレブリンカ絶滅収容所遺跡は、発掘調査が行われないうまま、遺跡全体が現在ではモニュメント (祈念施設) になってしまった。ベウジェツ絶滅収容所遺跡は、遺跡

全体がモニュメント化される直前に、主としてボーリング調査が実施された。これら二箇所の絶滅収容所では、少なくとも130万人のユダヤ人が虐殺されているが、もはや発掘調査は不可能である。これらとは対照的に、ヘウムノ絶滅収容所遺跡では発掘調査が実施され、多数の遺物が出土した。ヘウムノ絶滅収容所におけるガス虐殺の全工程は、大きな建物の近くで稼働させた二台のガス＝トラックにおいて実行されたが、死体の処理は別の場所で行ったため、ラインハルト作戦の絶滅収容所とは明らかに異なっている。それゆえに、ソビボル絶滅収容所遺跡の遺構・遺物は、考古学的発掘調査が実施可能な唯一の絶滅収容所遺跡といえる。そこには、モニュメント類や地域の博物館のようなくつつかの建物が建てられているが、それらが占める面積はごくわずかである。第Ⅰ収容区・第Ⅱ収容区は発掘調査を行う余地があり、この区域内のどこでも試掘坑を設定可能である。第Ⅲ収容区は、集団埋葬地に取り囲まれた遺灰塚（訳註：祈念施設の一つ）が主要部分を占めている。ソビボル絶滅収容所遺跡のこの部分では発掘調査を行うべきではなく、むしろ非破壊的な画像解析技術（non-invasive imaging techniques）のみを用いた遠隔的手法による研究が適切である（上記参照）。集団埋葬地とそれらの南側には二つのモニュメントが位置するが、ガス室とそれに関連する建造物が存在した第Ⅲ収容区の南西部は、将来の考古学的調査の余地が大いにある。収容所前面区は現在地元農家が住宅地と耕作地になっているが、今後もしこれらの場所がソビボル＝メモリアル公園の一部に編入されるのであれば、同様に発掘調査されるかもしれない。さらに、ソビボル収容所の降車場遺構も、メモリアル公園に編入する際には、やはり考古学的に調査すべきであろう。

ソビボル絶滅収容所遺跡は、多大な考古学的潜在価値と発掘調査が重要な多くの理由を明白に備えている。入手できる証拠の多くは生還者の記憶に基づく口述史料のためあいまいであり、その多くの事例には空間的に混乱した情報が含まれる。第Ⅰ・Ⅱ収容区に収容され労働させられていた生還者は、ガス室が位置する第Ⅲ収容区内部を見たことがないため（それらの目撃は即座の処刑を意味する）、ガス室の正確な位置を指し示すことはできない。ガス室の位置は、地球物理学的調査や遠隔撮影画像解析などを含む考古学的方法のみが唯一特定可能である。それゆえに、ソビボル絶滅収容所遺跡における考古学的調査の重要な貢献は、ラインハルト作戦の絶滅収容所計画に関する先入観に左右されない復元作業となりうるが、調査計画は未策定のままである。

建造物やそれらの空間的編成、それらの機能配置を形成した段取りに関する研究は、

考古学的調査の一側面にすぎない。ソビボル絶滅収容所遺跡から遺物を回収することも、発掘調査を行うべきもう一つの重要な理由である。いうまでもなく、ソビボル絶滅収容所遺跡や他の絶滅収容所遺跡からこれまでに出土した遺物は、建物の配置を適切に解釈するために必要不可欠である。出土品のもう一つの部類には、虐殺被害者自身が収容所に持参し、ナチスによって奪われた「本来そこにあるはずのない携行品類 (manuports)」的な遺物がある。これらには、衣類・眼鏡類・櫛類・歯ブラシ類・食卓用金物類・食器類・財布類・煙草入れ類・ライター類のようなものから、個人や家族の宝飾品や貴重品類、記念品類やユダヤ教の祭儀の備品 (Judaic objects) まで、虐殺被害者の多様な種類の所持品が含まれる。このような遺物は、絶滅収容所内で抹殺されたユダヤ人コミュニティの研究にとって欠かすことができないものである。

こうした物品類の学術的価値を超越しても、それらは公共物の一部として博物館において展示すべきである。地域の博物館での展示はごく限られたものであるが、トレ布林カとソビボルの森や原野にはおそらく何千点もしくは何十万点もの遺物が存在する。子供も大人も同様に、遺物に惹きつけられるので、教育と教材活用におけるそれらの役割と重要性は不可欠なものである (Darmanin and Mootz 2006)。

堆積物中における遺物の劣化進行のため、できるかぎり多くの遺物を速やかに回収することが重要である。さらにいえば、もし考古学者が遺物を回収してその保存と展示を行わなければ、それらは盗掘者に奪われ売却されて個人コレクションの中に姿を消してしまうのである。絶滅収容所遺跡の継続的な盗掘は、ポーランドでは良く知られる出来事である。

私たちは、絶滅収容所遺跡の考古学的調査とそこにある遺物の保存に関連して、ソビボル絶滅収容所の生還者の記憶と接続できる唯一の参照基準が考古学であると認識している。『レジナとの対話 (Conversations with Regina)』という書籍は、レジナ＝ジェリンスキ (Regina Zielinski) についての回想を基に彼女の息子であるアンジェイ (Andrew) が執筆した。そのなかの特別な出来事として、レジナ＝ジェリンスキが、彼女の殺害された母の結婚指輪を取り戻したい想いと、ナチスから隠し守るためにそれを床下の砂の中に落としたものであることについて、詳しく語っている。彼女の息子は、「戦後の考古学者のだれかが、この形見を見つけるかもしれない」、そしてさらに「私はなぜか、天使が発見するのを待っているのかのように、それは彼女がとても注意深く置いたときのままになっていると信じている」(Zielinski 2008 : 94頁) と示

峻している。残念ながら、現在の天使も、1939年～1945年と同様に、人類の希望を叶えてはくれないばかりか、天使よりも盗掘者が指輪を見つけてしまうかもしれないので、私たちは考古学者がそれを回収することを願っているのである。

謝 辞

本稿を寄稿する機会を与えて頂いたロンドン大学考古学研究所の Tim Schadla-Hall 博士と Brian Hole 氏に感謝します。Peter Fabian 博士は、2007年度の調査の際にご教示を与えて頂いた。Anna Belfer-Cohen 教授・Sorin Hermon 博士・Ofar Marder 博士・Steve Rosen 教授は、草稿を読み貴重なご指摘を与えて頂いた。ベン＝グリオン大学学長の Rivka Carmi 教授と総長の Jimmy Weinblatt 教授は、ソビボル調査計画に惜しめない支援を与えて頂いた。Włodawa=Sobibór 博物館長の Marek Bem 氏、ヤド＝ヴァシエム (Yad Vashem) 博物館長の Avner Shalev 氏およびヤド＝ヴァシエム国際ホロコースト調査研究所長の David Bankir 教授のご協力に感謝します。ソビボルでの地球物理学的調査を実施して頂いたハートフォード大学の Richard Freund 教授と Worley Parsons 有限会社の Paul Bauman 氏に大変感謝します。Alex Bay 氏はソビボルの航空写真に関する情報を提供して頂いた。Patrice Kaminski 氏は、図1を作成して頂いた。ヘウムノ出土遺物の掲載を許可して頂いた Konin 地区博物館の Łucja Pawlicka-Nowak 博士とロンドンの帝国戦争博物館の Hazel Brown 氏に深く感謝します。

引用参考文献

- ARAD, Y (1987) *Belzec, Sobibor, Treblinka: The Operation Reinhard Death Camps*, Indianapolis, Indiana University Press.
- ARAD, Y (1993) "Operation Reinhard": gas chambers in eastern Poland. IN KOGON, E, H LANG-BEIN and A RÜCKERL (Eds.) *Nazi Mass Murder a Documentary History of the Use of Poison Gas*. New Haven and London, Yale University Press.
- BAUMAN, P (2008) *Preliminary Report on the Geophysical, GPS, and High Resolution Aerial Photographic Investigations Former Sobibor Extermination Camp, Poland*, Calgary, Worley Parsons.
- BEM, M (2006) *Masterplan Sobibór: ...a place to remember ...a place to learn*, Włodawa, Muzeum Pojezierza Łęczyńsko-Włodawskiego.
- BEZWIŃSKA, J and G SCHINDLER (Eds.) (2002) *KL Auschwitz Seen by the SS*, Oświęcim, The Auschwitz-Birkenau State Museum.

- BLATT, T T (1997a) *From the Ashes of Sobibor: a Story of Survival*, Evanston, Illinois, Northwestern University Press.
- BLATT, T T (1997b) *Sobibor - the Forgotten Revolt*, Issaquah, WA, HEP.
- BLATT, T T (2008) *From the Ashes of Sobibor: a Story of Survival*, Włodawa, Muzeum Pojezierza Łęczyńsko-Włodawskiego.
- BROWNING, C R (1999) *Evidence for the Implementation of the Final Solution*, electronic addition. <http://www.holocaustdenialontrial.com/trial/defense/browning>.
- BUDZIAREK, M (2004) Marked by the “Breath of Death”. Jewish jewellery found in the Kulmhof extermination center IN PAWLICKA-NOWAK, Ł (Ed.) *The Extermination Center for Jews in Chełmno-on-Ner in the Light of Latest Research, Symposium Proceedings September 6-7, 2004*. Konin, The District Museum of Konin.
- CASELLA, E C and J SYMOND (Eds.) (2005) *Industrial Archaeology Future Directions*, New York, Springer.
- CHEETHAM, P, M COX, A FLAVEL, I HANSON, T HAYNIE, D OXLEE and R WESSLING (2007) Search, location, excavation, and recovery. IN COX, M, A FLAVEL, I HANSON, J LAVER and R WESSLING (Eds.) *The Scientific Investigation of Mass Graves*. Cambridge, Cambridge University Press.
- CONNOR, M (2007) *Forensic Methods Excavations for the Archaeologist and the Investigator*, Lanham MD, Altamira Press.
- COSSONS, N (Ed.) (2000) *Perspectives on Industrial Archaeology*, London, Science Museum.
- DARMANIN, M and D MOOTZ (2006) *Archaeology, the classroom and the Holocaust: telling human stories*. [http://www1.yadvashem.org/education/conference 2006/Daramin,%20Margaret_%20Mootz,%20Denis.pdf](http://www1.yadvashem.org/education/conference%202006/Daramin,%20Margaret_%20Mootz,%20Denis.pdf), Retrieved on December 14 2008.
- DOMBROWSKA, D and M BERENBAUM (2007) Sobibor. IN BERENBAUM, M and F SKOLNIK (Eds.) *Encyclopaedia Judaica*. Gale Virtual Reference Library, Macmillan Reference USA.
- EVANS, R J (1997) *In Defence of History*, London, Granta Books.
- EVANS, R J (2002) *Telling Lies about Hitler*, London New York, Verso.
- FREIBERG, D (2007) *To Survive Sobibor*, Jerusalem, Gefen Publishing House.
- GALLOWAY, P (2006) Material culture and text: exploring the spaces within and between. IN HALL, M and S W SILLIMAN (Eds.) *Historical Archaeology*. Malden, MA; Oxford, Blackwell Publishing.
- GILBERT, M (1986) *The Holocaust: the Jewish tragedy*, London, Collins.
- GILBERT, M (1997) *Holocaust Journey Travelling in Search of the Past*, London, Phoenix.
- GŁUCHOWSKI, P and M KOWALSKI (2008) Gold Rush in Treblinka. *Gazeta Wyborcza*, attachment pp.2-4, <http://rodohforum.yuku.com/reply/92506/t/Gold-Rush-in-Treblinka.html>.
- GOLDEN, J (2003) Remembering Chelmno. *Archaeology*, 56, 50-54.

- GOULD, R J (2007) *Disaster Archaeology*, Salt Lake City, The University of Utah Press.
- HALL, M and S W SILLIMAN (Eds.) (2006) *Historical Archaeology*, Malden, MA; Oxford, Blackwell Publishing.
- HICKS, D and M C BEAUDRY (2006) *The Cambridge Companion to Historical Archaeology*, Cambridge, Cambridge University Press.
- HILBERG, R (1985) *The Destruction of the European Jews*. Revised and Definitive Edition, New York, Holmes and Meier Publishers, Inc. [望月幸男・原田一美・井上茂子訳 1997 『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』 上下巻, 柏書房 (東京)]
- KOLA, A (2000) *Bełżec: the Nazi Camp for Jews in Light of Archaeological Sources: Excavations 1997-1999*, Warsaw-Washington, The Council for the Protection of Memory of Combat and Martyrdom and the United States Holocaust Memorial Museum.
- KOLA, A (2001) Badania archeologiczne terenu byłego obozu zagłady Żydów w Sobiborze. *Przeszłość i Pamięć. Biuletyn Rady Ochroni Pamięci Walk i Męczeństwa*, 4, 115-122.
- KRAKOWSKI, S (1993) The stationary gas vans at Kulmhof. IN KOGON, E, H LANGBEIN and A RÜCKERL (Eds.) *Nazi Mass Murder: a Documentary History of the Use of Poison Gas*. New Haven and London, Yale University Press.
- KRAKOWSKI, S (2004) The historical outline of the camp in Chełmno-on-Ner. IN PAWLICKANOWAK, Ł (Ed.) *Chełmno Witnesses Speak*. Konin and Łódź, The Council for the Protection of Memory of Combat and Martyrdom in Warsaw; The District Museum of Konin.
- LACHENDRO, J (Ed.) (2007) *German Places of Extermination in Poland*, Marki, Parma Press.
- LUKASZKIEWICZ, Z (1947) Obóz zagłady w Sobiborze. *Biuletyn Główniej Komisji Badania Zbrodni Niemieckich w Polsce*, III, 49-58.
- MORELAND, J (2001) *Archaeology and text*, London, Duckworth.
- NOVITCH, M (1980) *Sobibor: Martyrdom and Revolt*, New York, Holocaust Library.
- O'NEIL, R (1998) Bełżec—the 'Forgotten' death camp. *East European Jewish Affairs*, 28, 49-69.
- O'NEIL, R (1999) Bełżec: a reassessment of the number of victims. *East European Jewish Affairs*, 29, 85-118.
- O'NEIL, R (2004) *Bełżec: Stepping Stone to Genocide Hitler's answer to the Jewish Question*, <http://www.jewishgen.org/yizkor/belzec1/bel000.html#Forward>.
- O'NEIL, R (2007) *Archaeological investigations, a review by historians*. <http://www.holocaustre-searchproject.org/ar/modern/archreview.html>.
- PAWLICKA-NOWAK, Ł (2004a) Archaeological research in the grounds of the Chełmno-on-Ner extermination center. IN PAWLICKA-NOWAK, Ł (Ed.) *The Extermination Center for Jews in Chełmno-on-Ner in the Light of Latest Research, Symposium Proceedings September 6-7, 2004*. Konin, The District Museum of Konin.

- PAWLICKA-NOWAK, Ł (2004b) Archaeological research in the grounds of the Chełmno-on-Ner former extermination center. IN PAWLICKA-NOWAK, Ł (Ed.) *Chełmno Witnesses Speak*. Konin and Łódź, The Council for the Protection of Memory of Combat and Martyrdom in Warsaw; The District Museum of Konin.
- POHL, D and P WITTE (2001) The number of victims of Bełżec extermination camp: a faulty reassessment. *East European Jewish Affairs*, 31, 15-22.
- RASHKE, R (1995) *Escape from Sobibor*, Chicago, University of Illinois Press.
- REDER, R (1999) *Bełżec*, Krakow, Fundacja Judaica w Krakowie.
- RÜCKERL, A (1977) *NS-Vernichtungslager im Spiegel deutscher Strafprozesse Belzec, Sobibor, Treblinka, Chelmno*, München, Deutcher Taschenbuch Verlag.
- RUTHERFORD, W (2002) *Newest Sobibor Map June 1943*, <http://www.deathcamps.org/sobibor/pic/bmap21.jpg>.
- SCHELVIS, J (2007) *Sobibor. A History of a Nazi Death Camp*, Oxford & New York, Berg.
- SCHOFIELD, A J, W G JOHNSON, and C M BECK (2002) *Matériel Culture: the Archaeology of Twentieth-Century Conflict*, London; New York, Routledge.
- SCHOFIELD, J (2005) *Combat Archaeology: Material Culture and the Modern Conflict*, London, Duckworth.
- SERENY, G (1983) *Into That Darkness*, New York, Vintage Books. [小俣和一郎訳 2005 『人間の暗闇：ナチ絶滅収容所長との対話』, 岩波書店 (東京)]
- TICHO, K (2008) *My Legacy, Holocaust, History and the Unfinished Task of Pope John Paul II*, Włodawa, Muzeum Pojezierza Łęczyńsko Włodawskiego.
- WEISS, A (2003) *A monumental failure at Belzec*. <http://www.hir.org/amcha/belzec.html>.
- WEWRYK, K (2008) *To Sobibor and Back: an Eyewitness Account*, Włodawa, Muzeum Pojezierza Łęczyńsko Włodawskiego.
- WILLENBERG, S (1992) *Revolt in Treblinka*, Warsaw, Żydowski Instytut Historyczny.
- WITTE, P and S TYAS (2001) A new document on the deportation and murder of Jews during “Einsatz Reinhardt” 1942. *Holocaust and Genocide Studies*, 15, 468-486.
- ZIELINSKI, A (2008) *Conversations with Regina*, Włodawa, Muzeum Pojezierza Łęczyńsko Włodawskiego.

解 説

伊藤 慎二

本論文は、『Present Pasts』誌第1巻(2009年: Ubiquity Press・London)の10~39頁に掲載された Isaac Gilead (Archaeological Division, Ben-Gurion University of the Negev, Beer Sheva, Israel)・Yoram Haimi (同)・Wojciech Mazurek (SUB TERRA, Archaeological Examinations, Cheł-

m, Poland) による「Excavating Nazi Extermination Centres」の全訳である。訳出にあたっては、鬼束芽依（本学大学院国際文化研究科博士前期課程1年）を中心に山本恵梨（本学国際文化学部2年）が協力し、伊藤慎二（本学国際文化学部准教授）が全体を監修した。

なお、ナチス政権による絶滅収容所に関する用語やホロコーストの歴史的経過に関する細部名称や人物名などの専門用語の訳出に関しては、『ナチ強制・絶滅収容所：18施設内の生と死』（菅野訳 1998）と『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』（望月ほか訳 1997）を主に参考にした。

20世紀末頃より日本国内でも全国的にはほぼ一般化したアジア太平洋戦争期・第二次世界大戦期の戦争遺跡（遺構・遺物）に関する考古学的研究であるが、ほぼ同時期のヨーロッパでも本格化しはじめたナチス政権期（第三帝国期）の特にホロコーストの現場に焦点をあてた考古学的調査研究はあまり日本国内では知られていない。ドイツ現代史研究者の武井彩佳氏による研究状況の紹介（武井 2017）が、あげられる程度である。しかし、そこには日本における戦争遺跡の考古学的調査研究の今後に向けて参考となる課題が含まれる。

ナチス政権による強制・絶滅収容所に関する科学的検証は、ソ連軍などの連合軍による収容所の解放や隠滅工作跡地の占領直後から開始された。最初期の段階では、戦争犯罪証拠収集などの司法目的で行われた。やがて、戦後長期に及んだ米ソ冷戦終了後、ポーランド国内の各絶滅収容所跡の祈念施設・追悼公園整備が進むにつれて、緊急に考古学的発掘調査が着手されはじめた状況が本論で明らかにされている。日本国内でも、戦争経験世代の減少が進むなかで、改めて戦争遺跡の価値と考古学の役割が注目された状況と通じる。

しかし、ナチス政権によるユダヤ人等の大量虐殺の現場であった絶滅収容所遺跡の考古学的調査は、特有の深刻な二つの課題に直面することになる。その第一の課題は、ホロコーストの被害者の遺骨への対処である。ナチスによる絶滅収容所では、大量虐殺遺体の焼却後、しばしば遺骨の粉碎処理などを行い、それらを収容所敷地内各所の土壌や池の中に投棄隠蔽していた事例が多くみられる（菅野訳 1998）。絶滅収容所遺跡全体が、いわば被害者の広大な墓地としての性格を備えているのである。それらの土壌などの集団埋葬地の無配慮な発掘調査は、凄惨な死に追いやられた故人の遺体の尊厳を、再びユダヤ教の葬送儀礼習慣なども無視する形で、傷つけるのに等しいことになってしまうのである。ホロコーストからの生還者や遺族関係者にとって、それが耐え難い精神的苦痛をもたらすものであることは明白である。本文中でも紹介されているように、ベウジェツ（Bełżec）絶滅収容所遺跡の集団埋葬地におけるアンジェイ＝コラ（Andrzej Kola）によるボーリング調査の問題は、その後の絶滅収容所遺跡の考古学的調査に制約を与え、非破壊的な調査手法を積極的に導入するきっかけとなった。最近でも、ナチスによるユダヤ人虐殺被害者遺体発見の際の宗教的・人権的指針を考える国際シンポジウムも開催されている（Seidelman *et al.* eds. 2017）。これらの事例は、今後日本国内の戦争遺跡等における考古学的調査の際に、たとえば強制的に動員された朝鮮人・中国人労働者遺体の検出時にも参考となりうる。実際に、考古学的手法ではないが、北海道遠軽町・北見市の常紋トンネル周辺で民間有志調査団体が多様な出自のトンネル建設動

員労働者遺骨を発見した事例（菊地ほか 1983）や、東京都新宿区の陸軍軍医学学校跡地で日本陸軍 731 部隊の実験関連と推定されている人為的な加工痕跡のある人骨が発見された事例（常石 1992）もある。今後日本の近現代考古学も同様の人権の課題に直面する可能性が高い。

第二の課題は、「歴史修正主義 historical revisionism」（歴史否認主義 historical negationism）問題への対処である。ナチスによるホロコーストの存在否定や矮小化を特徴とする「歴史修正主義」は、ナチス政権やホロコーストに関する膨大多岐にわたる歴史学の研究蓄積や生還者・関係者の証言と根本的に対立し、史実の意図的な歪曲といえる言説である（Lipstadt 1993, Bastian 1997, Shermer 1997）。しかし「歴史修正主義」は、意外性や論点の単純化、そして学術的に公正な議論とは全く性質を異にする宣伝戦的で執拗な情報拡散を武器に、一般世論や非専門研究者に対して無視できない影響力をもつ。「歴史修正主義」の言説は、歴史学の批判検証を経た学説・仮説とは本来全く異なる性質のものであるが、一般社会にとって多様な学説と同等の異なる見解の一つとして許容されることで、史実の相対化という主要目的を達成してしまうのである。「歴史修正主義者」のデイヴィッド＝アーヴィング（David Irving）がホロコースト史研究者のデボラ＝リップシュタット（Deborah Lipstadt）を訴え、逆に自身の著述中の無数の史実の歪曲が法廷で明らかとなってアーヴィングが敗訴した裁判（Lipstadt 2005）は、近年映画化されたことでも著名である。この裁判の過程では、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所ガス室天井のチクロン B（Zyklon B）剤投入孔の有無も議論になった。そこで、ナチス親衛隊による隠蔽工作の爆破によって崩落大破したまま残存するガス室天井部分の遺構を、考古学と共通する調査手法で投入孔の存在を確認した研究例もある（Karen *et al.* 2004）。本論でも、繰り返し「歴史修正主義」問題に言及し、絶滅収容所遺跡における考古学的調査がホロコーストの実在性を疑うことではないことを明言しているのは、このような事情が背景にある。

現代の日本社会は、大日本帝国期の侵略戦争先や植民地での加害・人権侵害行為に関して、広がりや深さの点で欧米よりもはるかに深刻な「歴史修正主義」問題を抱えている。しかし、日本国内の戦争遺跡に関する考古学的研究では、こうした欧米での「歴史修正主義」に厳しく対峙する研究姿勢は、あまり広く共有されていない。日本国内の戦争遺跡の整備活用例では、とりわけ特攻隊関連遺跡とその関連展示施設において、全体主義体制への批判的検証を欠く例が目立つ。戦闘機の性能と検閲圧迫・洗脳・自己規制下の隊員個人の記録などを基に、大日本帝国期と同様の価値観や文言で解釈評価している場合も少なくない。そのため、このようなホロコースト関連戦争遺跡の調査研究における「歴史修正主義」と対峙する研究姿勢や方針は、今後の日本国内の戦争遺跡の調査研究にとっても大いに参考にすべきものといえる（伊藤 2019：204-206 頁）。たとえば、沖縄県南風原町の津嘉山北地区旧日本軍壕群 D-1 壕の発掘調査で、従軍慰安婦を軍が直接管理していた状況を裏付ける資料が出土した事例（上地ほか編 2010）なども実際にあり、日本国内においても考古学が「歴史修正主義」の克服に貢献できる潜在能力は大きいといえる。

最後に、本論以後のホロコーストに関する考古学的研究の状況についても簡単に紹介した

い。本論で中心的に取り上げられたソビボル絶滅収容所遺跡では、その後共著者のヨラム＝ハイミーとヴォイチェフ＝マズリクらによって発掘調査が継続され、ガス室のレンガ積基礎遺構の検出 (Hecking 2014, 本論図 12 建物遺構 A・D 東側の通路点線付近) や、アンネ＝フランクと同年に同じフランクフルトで誕生した少女の持ち物であったと考えられるペンダントの出土 (Aderet 2017) などが、報道されている。ちなみに、これらの報道によると、ヨラム＝ハイミー自身の親戚もソビボルの犠牲者であったことが明かされている。近年の研究で最大の進展としては、トレブリンカ (Treblinka) 絶滅収容所遺跡の発掘調査を実施したイギリスのスタッフォードシャー (Staffordshire) 大学の調査隊代表のキャロライン＝スターディー＝コールズ (Caroline Sturdy Colls) が、ホロコーストに関する考古学的調査研究の概念規定・諸課題・調査方法等を体系的に整理した概説書など (Sturdy Colls 2015, Sturdy Colls and Branthwaite 2016) を刊行したことがあげられる。また、アウシュヴィッツ第Ⅱ (ビルケナウ) 収容所のレンガ積み木造収容舎でも、保存修復作業にあたって床面や基礎部分などの考古学的発掘調査が実施され、収容者関連の遺物も出土した (Bedkowski *et al.* 2019 : pp.44-49)。そして、つい最近アメリカのハートフォード (Hartford) 大学のリチャード＝フロイント (Richard Freund) が、リトアニアのヴィリニュス市やギリシアのロドス島にあるナチス支配以前まで拠点的な施設であったシナゴグ (ユダヤ教会堂) 遺跡や、ヴィリニュス市近郊のユダヤ人大量虐殺・集団埋葬地などの主として非破壊的手法による調査成果を基に、ホロコーストの考古学に関する一般概説書 (Freund 2019) を刊行した。このように 2010 年代に入り、急速に進展をみせているホロコーストの考古学的調査研究であるが、本論文はそうした本格化初期の、それ以前の先行研究成果を網羅的に批評紹介し、現在の研究の基礎につながる問題提起を行った論文といえる。

引用参考文献

- 伊藤慎二 2019 「日常風景のなかの戦争の痕跡：西南学院の戦争遺跡を歩く・記憶する」、中島和男・片山隆裕編『戦争を歩く・戦争を記憶する』：199-226 頁，朝日出版社（東京）
- 上地克哉ほか編 2010 『津嘉山北地区旧日本軍壕群Ⅱ』，南風原町文化財調査報告書第 8 集，南風原町教育委員会（沖縄）
- 菊地武男ほか 1983 『トンネルの壁のなかから：常紋トンネル工事殉難者追悼碑完成記念誌』，常紋トンネル工事殉難者追悼碑建設期成会（北海道）
- 武井彩佳 2017 「ホロコースト「現場」への考古学的アプローチ：テクノロジーが開く新たな次元」、『現代史研究』63 号：17-28 頁，現代史研究会（東京）
- 常石敬一 1992 『骨は告発する：佐倉鑑定を読む』，軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会，海鳴社（東京）
- Aderet, Ofer 2017 *The Archaeologists Excavating Nazi Death Camps in Search of Holocaust Victims' Untold Stories*, *Haaretz* Nov. 25 (Tel Aviv)

- Bastian, Till 1997 *Auschwitz und die "Auschwitz-Lüge"*, Verlag C. H. Beck oHG (München) [石田 勇治・星乃治彦・芝野由和編訳 2005 『アウシュヴィッツと〈アウシュヴィッツの嘘〉』, 白水Uブックス 1080, 白水社 (東京)]
- Będkowski, Kamil *et al.* 2019 *To Preserve Authenticity: The Conservation of Brick Barracks at the Former KL Auschwitz II-Birkenau*, Państwowe Muzeum Auschwitz-Birkenau w Oświęcimiu (Oświęcim)
- Freund, Richard A. 2019 *The Archaeology of the Holocaust: Vilna, Rhodes, and Escape Tunnels*, Rowman & Littlefield (London)
- Hecking, Claus 2014 The Archeological Excavations that Led to the Gas Chambers of Sobibor, *Spiegel Online*: September 26 (<https://www.spiegel.de/international/zeitgeist/the-archeological-excavations-that-led-to-the-gas-chambers-of-sobibor-a-993733.html>)
- Hilberg, R. 1985 *The Destruction of the European Jews*. Revised and Definitive Edition, Holmes and Meier Publishers, Inc. (New York) [望月幸男・原田一美・井上茂子訳 1997 『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』 上下巻, 柏書房 (東京)]
- Karen, D., J. McCarthy, and H. W. Mazal 2004 The Ruins of the Gas Chambers: A Forensic Investigation of Crematoriums at Auschwitz I and Auschwitz-Birkenau, *Holocaust and Genocide Studies* Vol. 18(1): pp.68-103, Oxford University Press (Oxford)
- Lipstadt, Deborah E. 1993 *Denying the Holocaust*, The Free Press (New York) [滝川義人訳 1995 『ホロコーストの真実：大量虐殺否定者たちの嘘ともくろみ』 上下巻, 恒友出版 (東京)]
- Lipstadt, Deborah E. 2005 *Denial: Holocaust History on Trial*, Ecco (New York) [山本やよい 訳 2017 『否定と肯定：ホロコーストの真実をめぐる闘い』, 株式会社ハーパーコリンズ ジャパン (東京)]
- Ruby, Marcel 1995 *Le livre de la Déportation: la Vie et la Mort dans les 18 Camps de Concentration et d'Extermination*, R. Laffont (Paris) [菅野賢治訳 1998 『ナチ強制・絶滅収容所：18施設内の生と死』, 筑摩書房 (東京)]
- Seidelman, W., L. Elbaum, and S. Hildebrandt 2017 *How to Deal with Holocaust Era Human Remains: Recommendations Arising from a Special Symposium*, Yad Vashem, The World Holocaust Remembrance Center (Jerusalem)
- Shermer, Michael 1997 *Why People Believe Weird Things: Pseudoscience, Superstition, and Other Confusion of Our Time*, Brockman Inc. [岡田靖史訳 2003 『なぜ人はニセ科学を信じるのか：歪曲をたくらむ人々』 II, ハヤカワ文庫 NF281, 早川書房 (東京)]
- Sturdy Colls, Caroline 2015 *Holocaust Archaeologies: Approaches and Future Directions*, Springer (Cham)
- Sturdy Colls, C. and M. Branthwaite 2016 *Treblinka: Archaeological Investigations and Artistic Responses*, Centre of Archaeology, Staffordshire University (Staffordshire)